

垂水南遺跡発掘調査概報Ⅱ

大阪府吹田市垂水町

1978年3月

吹田市教育委員会

序

今日、都市化現象の進展は、旧来の地域社会に大きな変貌をもたらし、人々を地域から遊離させ、地域への帰属意識と住民間の連帯意識の希薄化を招いています。

こうした現状に対処し、失われつつある地域の連帯感の回復と新たな地域社会の建設を求める声が高まっていますが、地域の連帯意識をはぐくみ育てていくためには郷土への認識と理解を欠かすことはできません。

郷土——その言葉の中に幾多の歳月を経過し生成発展を繰り返しながらも今日まで守り、伝えられてきた文化の存在を見出すことができます。

すなわち、太古の昔から郷土に生まれ、郷土を生活の、そして生産の場として、さらに文化創造の場として生きつづけた祖先の歩みを、無言のうちになおかつ最も雄弁に語り伝えるのが郷土の文化遺産である文化財といえます。

現在を生きる私たちが歴史の流れのひとときに生存する限り文化的風土ともいえる文化財を保護し、郷土文化を継承することは、私たちの責務であるとともに、それを基盤として地域社会の精神的糧である地域文化の振興へと発展させることができるでしょう。

郷土の歴史を解明し、その文化遺産を保存するため、昨年度にひきつづき垂水南遺跡の発掘調査を実施いたしました。

当地域は、区画整理事業によって閑静な田園地帯から市街化地域へと急激な変容をとげましたが、その近代的な町づくりと対照的に古墳時代を中心として、弥生時代から中世にいたる複合遺跡として注目を浴びてまいりました。

しかしながら、その所在が広範囲に及んでいるため、全貌を明らかにするためには、今後とも継続的な調査が必要であり、それをとおして郷土の文化遺産の顕彰と保存に努める所存ですが、市民のかたがたの文化財保護に対する一層の御理解と御協力をお願いし、本年度の調査結果を御報告いたします。

昭和53年3月

次 田 市 教 育 委 員 会

教 育 長 中 村 勇 一

例　　言

- 1.本報告は、吹田市教育委員会が国庫補助を得て実施した、吹田市垂水町所在の垂水南遺跡の発掘調査の報告である。
- 2.発掘調査は、2度に亘って実施した。第1次は、垂水町3丁目16-3（C-5地区）において昭和52年8月5日より8月26日まで、第2次は、垂水町3丁目23-7（B-7地区）で昭和53年3月1日より3月15日まで行った。
- 3.今回の調査のうち、C-5地区についてはすでに現地説明会資料として「垂水南遺跡発掘調査略報」（1977.8.21）〔プリント〕で速報したが、本概報をもって今回の調査のまとめとする。
- 4.今回の両調査地点ともC-4地点の標高2.9m（第1図）を基準として水準測量した。また、C-5地区の発掘区南北基準線はN8°E、B-7地区のそれはN10°Eである。

調　　査　参　加　者

吹田市教育委員会

亀島重則

関西大学文学部考古学研究室

藤原学

東泰三

福本明

米田文孝

西岡幸治

服部聰志

吹田市立第六中学校

岡田健二

目 次

第1章 調査の動機	1
第2章 位置と環境	3
第3章 調査の経過	4
1. C-5地区の調査	
2. B-7地区の調査	
第4章 造 構	8
C-5地区	
a. 発掘区内の層序関係	
b. 積穴式住居址	
c. 掘立柱建物	
d. 土 壤	
e. 溝	
f. 南 北 小 溝	
B-7地区	
基本的層序	
第5章 出土遺物	17
C-5地区	
a. 弥生時代後期～古墳時代前期土器	
b. 須恵器 瓷	
c. 土師器 把手	
d. 石 器	
e. 木 製 品	
f. 植物遺存体 桃核	
B-7地区試掘時出土遺物	
a. 高杯形土器	
b. 木 製 品	
第6章 ま と め	29

挿 図 目 次

第1図 遺跡の地区割図	2
第2図 千里丘陵周辺の遺跡(弥生時代～古墳時代)	4
第3図 C-5地区発掘場位置図	5
第4図 C-5地区発掘区小区割図	6
第5図 B-7地区発掘区小区割図	7
第6図 層序関係模式図	8
第7図 遺構図	8
第8図 土器出土状況	9
第9図 挖立柱穴・土壤位置図	10
第10図 南北小溝	14
第11図 層序関係模式図	15
第12図 丸木杭・木片出土状況	15
第13図 木器出土状況	16
第14図 土器実測図(1)	18
第15図 土器実測図(2)	19
第16図 石製勾玉	21
第17図 竪杵	22
第18図 丸木杭	23
第19図 高杯形土器	23
第20図 木製容器・着柄器	24
第21図 柱痕の出土層位	29

挿 入 写 真 目 次

写真1 造り方設定風景	4
写真2 線(33)出土状況	4
写真3 発掘区北半部分の作業風景	5
写真4 検出中の住居址(1・2号)	6
写真5 遺構実測風景	6
写真6 1号住居址溝・小穴	9
写真7 挖立柱穴群	10
写真8 柱穴	12
写真9 柱穴	12
写真10 柱穴	12
写真11 溝埋積状況	12
写真12 溝・柱穴	13
写真13 柱根	13
写真14 B-7地区発掘場北壁新面	15
写真15 B-7地区発掘区全景	16
写真16 土器(12・13)出土状況(12区)	17

表 目 次

第1表 挖立柱穴・土壤の一覧表	11
第2表 粗痕の計測値	21
第3表 桃核の計測値	23
第4表 土器一覧表	25~28

図 版 目 次

図版1 C-5地区調査地点の全景(発掘前)	
図版2 調査地点の全景	
図版3 発掘区の全景	
図版4 南北小溝・溝及び土器出土状況	
図版5 土壌・掘立柱穴(発掘中)	
図版6 竪穴式住居址(1・2・4号住居址)	
図版7 竪穴式住居址(1・2・4号住居址)	
図版8 竪穴式住居址(3号住居址)	
図版9 B-7地区調査地点の全景・遺物出土状況	
図版10 出土遺物 土器1	
図版11 出土遺物 土器2	
図版12 出土遺物 土器の製作手法	
図版13 出土遺物 石器・木器・土器	
図版14 木製品(B-7地区試掘調査時出土分)	

第1章 調査の動機

垂水南遺跡が所在する吹田市垂水町から、西に隣接する江坂町一帯は、北大阪の副都心を目指す急激な開発により、ここ10年足らずの間に大きく変貌した。標高は2.5m～3mの低地で、開発前は一面の水田地帯であった。垂水南遺跡は、昭和41年9月、南吹田土地区画整理事業に伴う下水管敷設に際し、多数の土器・木器が出土したことにより発見された。発見者の若村正博氏(現在大阪府文化財愛護推進委員)は、大阪府教育委員会への通知のなかで、採集された土器等をもって、新遺跡であることを指摘、さらに出土地点の範囲を垂水町3丁目18～23、25～28の広範囲であることも明らかにされている。大阪府教育委員会は、昭和44年発行の「大阪府文化財総合分布図」において、この遺跡を弥生遺跡として記載、統いて吹田市教育委員会は、その刊行物(吹田市文化財地図、吹田の文化財第1集、第2集)で、弥生～古墳～奈良時代に至る複合低地性集落址として位置づけた。

遺跡発見の契機となった南吹田区画整理事業は、昭和45年に一応の完成をみたが、それに引き続き、急激な開発の波が押し寄せ、遺跡の破壊が不可避な事態となつた。この事態に対処するため、昭和51年度に国庫補助による埋蔵文化財緊急調査を実施し、本遺跡の実態解明に着手したのである。

昭和51年度の調査に先立つて分布調査を行つて同年6月18日、垂水町3丁目25-13のビル新築工事現場(C-8地区、第1図)において、多数の土器が出土しているのを確認した。即刻この地点で3次にわたり調査を実施、窓穴式住居址、掘立柱建物址、土塁などが検出され、大きな成果をあげた。それと同時に垂水南遺跡の規模が、從来捉えていたより以上に広範囲にわたることを確認したのである。

以上のような経過を経て、昭和51年度の発掘調査を同年11月10日から12月29日まで4次にわたり実施した。C-7地区では、河道跡が発見され、土器・木器を多量に検出した。C-4地区では、中世の溝・杭列、奈良時代の土器・木器、古墳時代の木組み(堰)が検出された。又、D-5地区では、遺構が検出されず本地点以西に東限がくることが判明した。その結果、前述したビル新築工事現場の調査成果と考えあわせると、次のような所見が得られた。

まず、当遺跡の古墳時代の集落の立地についてであるが、住居群および土塁群はその標高が約1.0mであることがわかった。さらに、土器包含層位や当時の旧河道を勘案すると、本地域には縦横に河道が走り、その間際に島状に微高地が発達、その上に住居等が構えられていたと考えられるのである。

次いで集落の性格であるが、明確にはできなかったまでも、遺構面の標高が示すように、海岸沿線に近い集落であることが想定でき、当時の大阪湾～河内湖近辺の地形から推察するに、両者を結ぶ水道部分の北岸を占める集落とみることができよう。のことより、以後の調査に



第1図 遺跡の地区割図 (地区名は、遺跡全体を東西南北の街路線によって区画し、その各区画の南東部の交点の符号を採って用いた。)
斜線部は今回の調査地区、アミ部は既組地区。

において究明しなければならない重要なポイントとして、この集落の政治的、経済的な役割を見逃がすこととはできないであろう。

今回の調査も以上の成果をふまえ、昨年度からの方針を継承して行ったものである。調査は2次に分け、第1次調査は昭和52年8月5日～同26日、第2次調査は昭和53年3月1日～同15日を行った。第1次調査では遺跡北東部の実態把握、第2次調査では遺跡南西限の究明に重点を置いた。

発掘調査は、吹田市教育委員会社会教育指導員 魁島重則が担当し、調査員として関西大学藤原 学氏が参加、指導した。また、同大学考古学研究室からは学生諸氏の派遣のみならず多大の協力、助言を得た。

さらに、この調査を遂行するにあたり、土地所有者の魁島武夫氏、小西 実氏および株式会社紙谷工務店に多くの協力援助を受けた。ここに深く感謝の意を表する次第である。

第2章 位置と環境

垂水南遺跡は、前述したように吹田市垂水町3丁目の標高2.5~3mの低地に所在する。現在の垂水町は、吹田市制施行(昭和15年)の際に吹田町他3ヶ村と合併して吹田市に含まれた地域で、市内南西部に位置する。

本遺跡の北約500mの地点から北へ丘陵が広がっているが、これが千里丘陵であり、吹田市域では平均標高約50mである。千里丘陵は、淀川以南の枚方丘陵、泉北丘陵などと共に、前期洪積層を主体とする隆起地形で、範囲は約8km四方にわたる。この丘陵が、農業経済社会においては大きな意味を持つのである。すなわち、丘陵の蓄える地下水は恵みとなるものの、雨水はすべて縁辺部およびそれに続く沖積平野に流出するため、その処理が当時の生産力維持の最大課題となっていたはずである。具体的に述べるならば、中小の河川が千里丘陵から本遺跡に南流し、その生活基盤を左右していたのである。

以上が極めて概略的な自然環境であるが、次いで、考古学上の研究成果によって明らかになっている限りでの周辺遺跡の状況を述べてみたい。(第2図)

猪名川左岸地域には数ヶ所の縄文晩期遺跡があるが、人々の顕著な生活の痕跡を見出せるのは、やはり弥生時代に入ってからである。

平地部では、尼崎市の田能遺跡⁽¹⁾、豊中市の勝部遺跡⁽²⁾ほか、豊中市には利倉⁽³⁾、上津島河床⁽⁴⁾、上津島⁽⁵⁾、島田⁽⁶⁾、穂積⁽⁷⁾、小曾根⁽⁸⁾の各弥生遺跡があり、丘陵縁辺部でも原田遺跡⁽⁹⁾等がある。吹田市域内に入ると、調査の立ち遅れもあってその遺跡の実態は不十分ながらも、平地部では本遺跡西方に藏人遺跡⁽¹⁰⁾、南方に南吹田五反島遺跡⁽¹¹⁾、東方に都呂須遺跡⁽¹²⁾が所在することが判明している。また、丘陵部には前述した千里丘陵南端に大規模な垂水遺跡⁽¹³⁾が位置する。

上記の弥生遺跡のうち、古墳時代まで継続する遺跡として、豊中市域の利倉、勝部の両遺跡および吹田市の藏人遺跡がある。そして、土器編年上の名祖遺跡となった庄内遺跡⁽¹⁴⁾も本遺跡の南西3km足らずのところに位置する。これらの各遺跡のなかで、本遺跡に最も近接する垂水、藏人両遺跡は、それぞれの実態解明のため、その関連性に非常に关心が持たれるところである。

次いで古墳であるが、本遺跡北方1km余のところに垂水西原古墳⁽¹⁵⁾がある。発見が造成工事後であったため、残念ながら墳形、内部構造等は知ることができなかった。しかし、残存してい

た石材の中に、小口部分に赤色顔料の塗布されていたものがあり、豊穴式石室を内蔵していた可能性が高く、その立地条件から推察するに前期古墳であると想定できる。

他に、千里丘陵東南端、本遺跡東方1.2kmに出口古墳⁽¹⁾、北西方1kmに感神宮所在古墳⁽²⁾があり、遠くには西北方2kmに梅鉢古墳⁽³⁾、同3kmに桜蒙古墳群⁽⁴⁾、東北方3km余に吉志部古墳⁽⁵⁾がある。

このうち、吹田市域の出口古墳は6世紀初頭、感神宮所在古墳は7世紀初頭、吉志部古墳は6世紀末葉とみられ、垂水南遺跡とはやや時期的な隔たりがある。時期的、位置的にも、本遺跡を見おろす垂水西原古墳が、最も関連のある古墳ではないかと考えられる。いずれにしても本遺跡周辺は、古墳の規模、数量とともに西方の豊中市域より劣っており、その稀少性はこの地域の特徴でもある。

奈良時代に至ると豊中市域では施寺址が確認されているが、吹田市域では明確な寺院址はみうけられない。当地周辺は、寺院址の存在より、むしろ、東寺領垂水庄の成立（弘仁3年）、あるいは、古代末には成立していたと思われる春日社領垂水西牧の関連遺跡が検出される可能性が残されている。

第3章 調査の経過

C-5 地区の調査（第3・4図）

昭和52年8月4日、発掘調査に先立って調査地域の下草刈りとゴミ掃除を行い、環境整備しておく。5日、調査資材を現地へ搬入。現状写真の撮影と平板測量を行う。6日、重機により盛土部分及び耕作土（深さ約1.3m、広さ約5×17mの範囲）を掘鑿する。発掘坑西南端の深掘部分で白色砂の落ち込みを認める。溝状に発掘縫を横断するようである。8日、本日より発掘作業にはいる。重機で掘った縫内を整え、遺物包含層の上面まで掘り下げる。包含層上面及びその上層の白色砂層中より土師器・須恵器の小片を検出した。10日、包含層上面を精査。6日に検出した溝状遺構は、幅約2mで北東～南西方向で縫外へ伸びる。それを切り込んで幅約30cmの浅い溝が南北方向に走るのを確認した。写真を撮影。11日、発掘区内の小区割りをする。



写真1 道り方設定風景

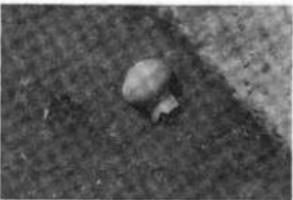
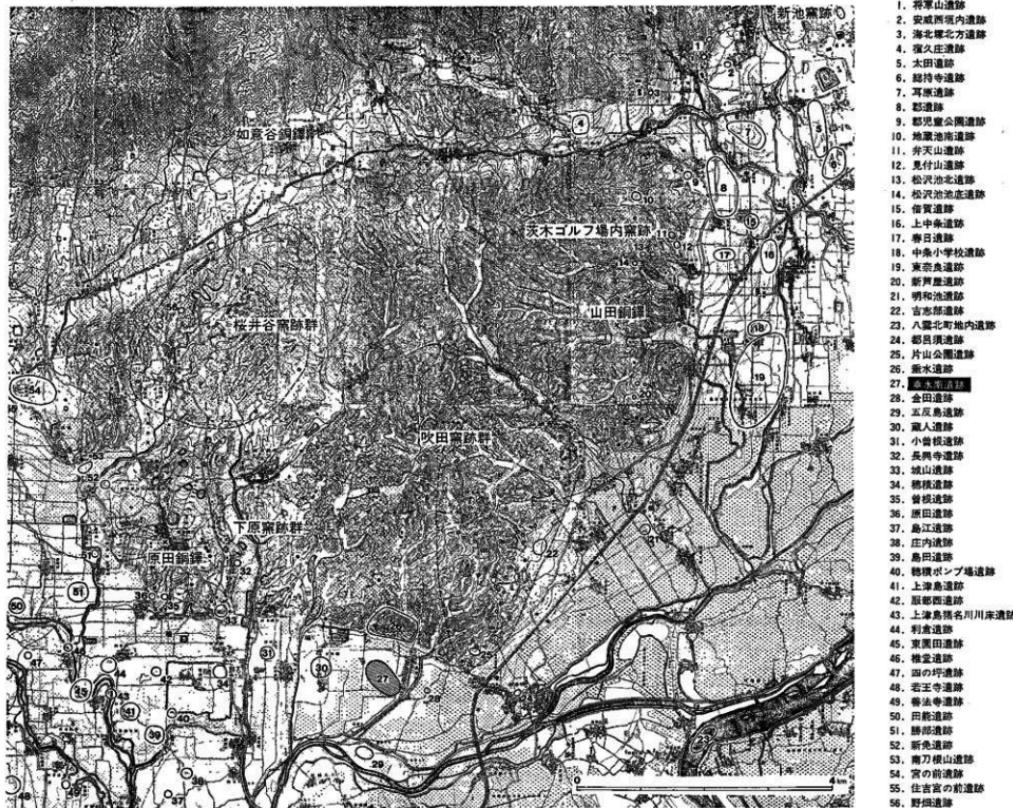
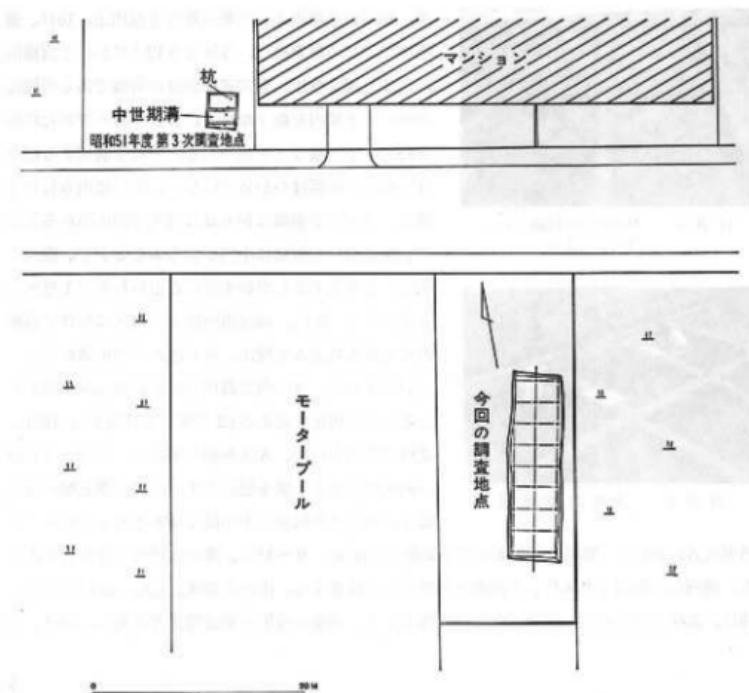


写真2 縫(33)出土状況(3区、第Ⅱ層)



第 2 図 千里丘陵周辺の遺跡（古生時代～古漸時代）



第3図 C-5地区発掘場位置図

る。1区画2m四方で16区設ける。区画番号は第4図のとおり。造構実測用に造り方を打つ。貫板高は、1.70m(東約30mの道路中央の標高2.9mより水準測量)。北側の4区画を約5cm程掘り下げる。12日、新たに南へ2区画掘り下げる。15区で土師器がたまつて出土(第8図)、3区で須恵器縄1点、第Ⅲ層で石製勾玉1点が出土したのみであると小片を少量検出したにとどまる。南北溝は7m以上に及ぶと思われる。溝内より土器の微細片を採取したのみで時期は不明である。13日、5~10区を除いて掘り下げる。引きついで大きい方の溝内を掘る。約15cm下で粘土面に達する。15日、各区で土壌・柱穴等が検出される。2・3区で2×1.5m以上の炭層の広がりを確認。層中より酒津式窯の口縁部片を検



写真3 発掘区北半部分の作業風景

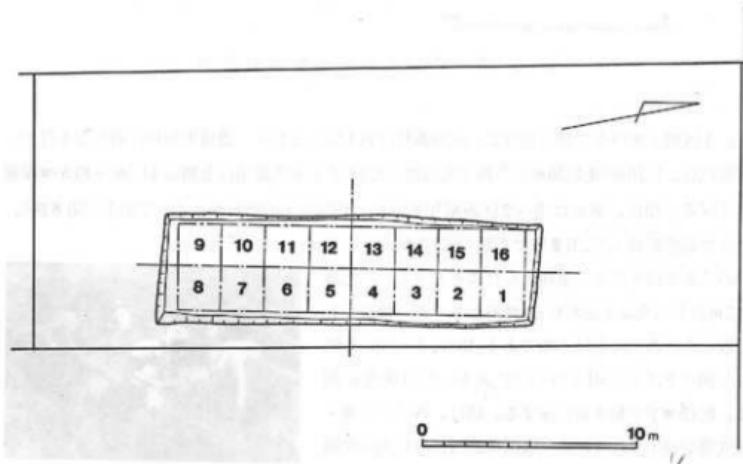


写真4 検山中の住居址 (1・2号) 東より



写真5 遺構実測風景

出。16区の土壇内より磨製石斧片1点出土。16日、遺構検出のため査定続行。3区より12区にかけて直線的に走る小溝を検出。竪穴式住居址の周溝である可能性が強い。土壇内を掘り始める。17日、各区で新たに掘立柱穴・小土壙などが見つかる。一棟を構成する掘立柱穴相互の関係はつかめていない。昨日検出された小溝は、3区で不明瞭ながらほぼ直角方向に曲がることや、溝に沿って両側に小穴が並ぶことより、竪穴式住居址と考えてさしつかえないと思われる(1号竪穴式住居址)。また、同区西南部より14区にかけて直線的に走る落ち込みを検出。落ち込み下で小溝が沿って見い出された。3区内で直角方向に落ち込みが曲がることより住居址を考える(2号竪穴式住居址)。18日、遺構の実測を行う。8区を掘り下げる。南西より北東へ直線状に走る小溝を見い出す。南側の溝上端の方が低く、竪穴式住居址の床面側になると考えられる(3号竪穴式住居址)。溝内壁面と床面に土師器片を検出。9~11区、溝のほぼ西半分を掘りあげる。溝内白色砂層より木片、土師器・須恵器片を探集する。市の広報係、現場へ取材にくる。19日、遺構の実測続行。午後、雨のため作業中止。調査の成果を報道関係者に発表。20日、遺

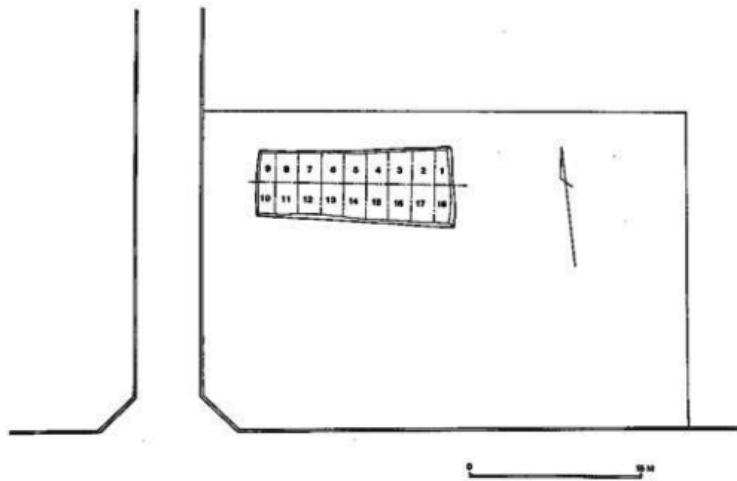


第4図 C-5地区発掘区小区割図

構の実測続行。21日、午前11時より正午まで現地説明会を開く。市民約100名参加。アゼ断面の写真と実測図を取る。完了のものから取りはずしにかかる。22日、アゼ断面の写真と実測を続ける。溝内粘土面の下を掘る。粘土の薄層をへて砂層になっており、約15cmで溝底になる。層中より土師器片、木片出土。溝底面中央にはぼ直線状に小穴が並らぶ。そのうち2箇所で木質部分が遺存していた。溝の掘鑿以前の遺構と思われる。23日、溝断面の写真・実測を行う。3区北東部分ではぼ直角に曲がる小溝を検出。竪穴式住居址の周溝と考えられる（4号竪穴式住居址）。さらに精査に努める。24日、雨のため作業を中止。25日、9~11区南北基準線に沿って幅約50cmのトレンチを掘る。断面図を作成する。溝底面の木質遺存穴を深掘する。約40cm下で竪杵を検出。子細に観察しようとしたが湧水激しく、取り上げてしまう。26日、全体写真及び遺構ごとの部分写真を撮る。実測図を点検、補間する。午後より小雨の中、遺構面に砂を入れて埋め戻し、発掘調査を終了する。

B-7地区の調査（第5図）

昭和53年3月1日、重機を使用して敷地内北西の一画約6×16mを盛土、耕作土部分まで掘鑿する。発掘境内を整え、第Ⅲ層暗茶褐色粘土層上面まで掘り下げる。5日、発掘区内の小区割りをする。2m四方の方眼で18区設けた。各区を掘り下げ始める。層中より土師器片を微量検出したのみで遺構らしきものは見い出せない。第Ⅲ層上面より約15cmで第Ⅴ層茶褐色粘土層に達する。炭粒を微量ながら含む。植物片の混入が見られる。とくに下層、第Ⅳ層との境界付近に層を成す。土器は包含していない。少量の木片、しかも製材されたものや一部に火を受け



第5図 B-7地区発掘区小区割図

て炭化したものが見られる。18区の南端より杭・丸木・木材片が集中して検出されたのみで遺構は検出されなかった。第V層はシルト質の土層で、遺構は検出されなかった。13日、発掘壕北壁断面の写真と実測を行う。14日、200分の1の縮尺で平板測量を行い、発掘壕及び実測基準線を記入する。昨夏のC-5地区に使用したのと同じ標高2.9m点より水準測量する。現地表面上で約2mである。15日、発掘壕を埋め戻し、調査を終了する。

第4章 遺構

C-5地区

a. 発掘区内の層序関係（第6図）

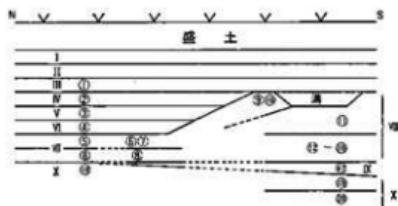
遺構の記述に入る前に、それらのベースとなったあるいはそれらを覆い尽した各土層の様相を記しておく。

発掘区内で見られる土層は、盛土下が旧水田面であり、耕作土層（I層）→淡茶褐色粘土層（II層）→白色砂層（III層）→遺物包含層（IV層～VII層）→自然層（VIII層）とに大別される。

第III層は、発掘区全域に亘って見られる。今回検出した遺構群が廃絶した後、洪水により堆積したもので層厚約7cm。弥生式土器～古式土器・須恵器片・奈良時代の土器片・土師質小皿・瓦器・陶器片を包含するところから中世以降に堆積したものであろう。

第IV層も発掘区を普遍的に覆う土層である。区内南北では、南北方向の小溝や溝はこの層より掘り込まれている。層厚5～10cm。弥生式土器～古式土器・須恵器片を含む。区内中央より西側では白色砂の薄層を挟んで円錐（径2～3mm）の有無によって二層に区分される。上面で標高約1.55～1.35m、区内中央部で高く南北両側に行くにしたがって若干低くなる。

第V層は、区内北半部を覆う土層である。層厚5～10cm。



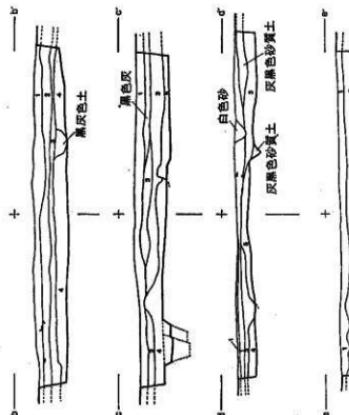
第6図 層序関係模式図

第IV・VII層は、第V層と同様に区内北半部のみに見られる。第VI層は層厚6～11cm。第VII層は土壌I・II・III等のベースである。層厚12～15cm。

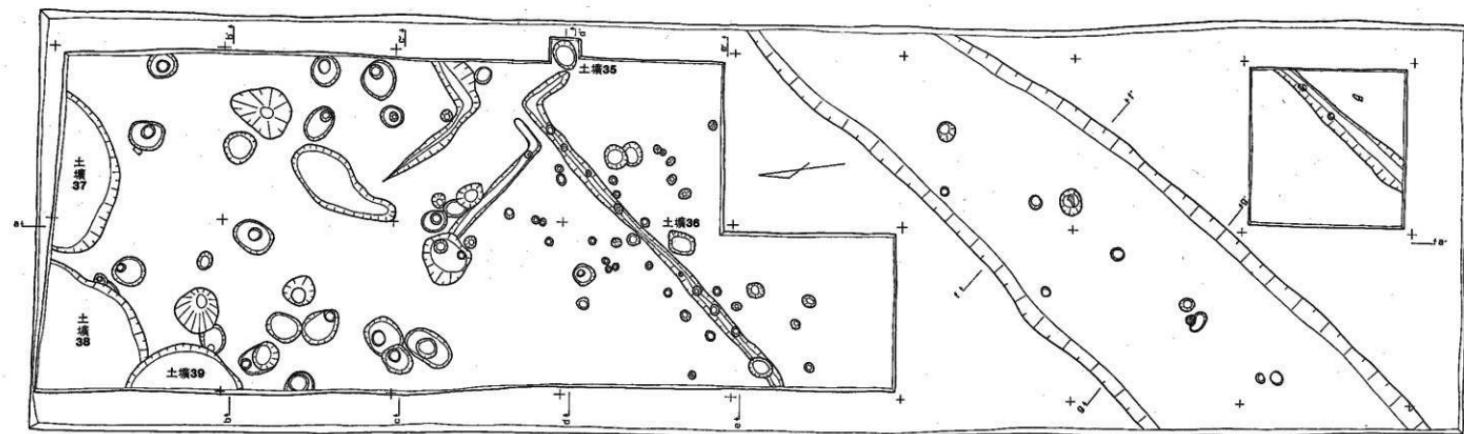
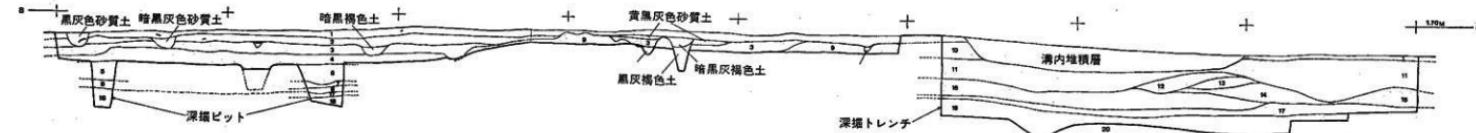
第VII層のうち5～10層は区内南端部を除いて広く見られる土層で、北半部の掘立柱建物や1・2・4号竪穴式住居址のベースである。区内中央部つまり住居址のベ

土層名

1. 灰色質實土層(a-b層、第Ⅳ層)
- (iは1-b層を指す)
2. 黑灰色砂土層(第V層)
3. 黃灰黑色質土層(第VI層)
4. 黃灰色砂質土層(第VII層)
5. 黑灰褐色質土層(第VIII層)
6. 明灰褐色質土層(第IX層)
7. 暗赤灰褐色沙層(第X層)
8. 明灰褐色沙層(第XI層)
9. 黃灰白色質砂層(第XII層)
10. 黃灰白色沙層(第XIII層)
11. 淡灰黑色沙層(第XIV層)
12. 青灰色沙層(第XV層)
13. 黃灰色砂質土層(第XVI層)
14. 黑灰色粘土層(第XVII層)
15. 深掘色沙層(第XVIII層)
16. 淡赤色沙層(第XIX層)

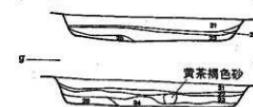


17. 黑灰褐色粘土層(第XX層)
18. 黑褐色粘土層(第XXI層)
19. 黃茶褐色沙層(第XXII層)
20. 黑色粘土層(第XXIII層)

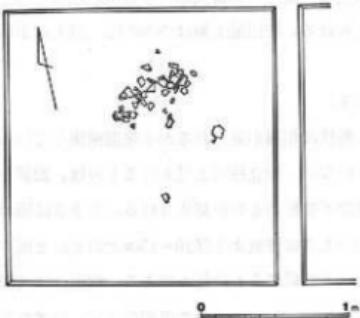


土層名(溝内堆積層)

21. 白色砂層
22. 黄茶褐色砂層 両層間に粘土の薄層を挟む。
23. 黄褐色砂層 両層間に灰白色粘土の薄層を挟む。
24. 青灰色砂層
25. 黄褐色砂層



第7図 造 構 図



第 8 図 土器出土状況 (15区Ⅳ層)

b 穹穴式住居址 (第 7 図・図版 6 ~ 8)

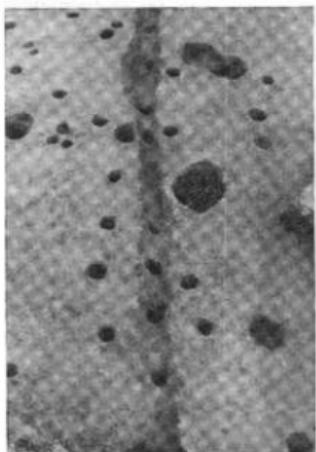
発掘区の中央で 3 棟、南端で 1 棟検出した。住居番号は、検出順による。各住居址とも全容を明らかにすることはできなかったが、直線状に走る周溝を認めたことにより方形のプランをもつものと考えられる。

1 号住居址は、一辺 4.4m 以上の規模である。周溝は幅 10~20cm、深さ 6cm で、それに沿って住居址内外に径 10cm 程の小穴が並ぶ。周溝の方向は、N56°E。明瞭に主柱穴と考えられるものは見当らない。

2 号住居址は、1 号住居址の北東部に接して検出された。直線状に走る落ち込みを 1.6m に亘って認めたものである。落ち込みコーナー近くに径 7 × 8cm の深い小穴を認めるくらいである。外側南西辺に小穴が数個みられるが、この住居址に伴うものかどうか分らない。

4 号住居址は、2 号住居址より北東方向に 0.85m 離れて検出された。2 号住居址の落ち込みより低い位置ではほぼ直角に曲がる溝が認められた。幅 12~36cm でコーナー部付近に径 12 × 13cm、深さ 16cm と外に径 19 × 21cm、深さ 26cm の小穴を認める。以上の 3 棟は、同時に存在していたことは近接しすぎるため不可能であるが、住居址の主軸がほぼ一致していることより、4 → 2 号住居址へと増築したものかあるいは移築したものであろう。

3 号住居址は、8 区で直線状に走る落ち込みとその直下の溝として検出した。溝は幅 14~36cm、深さ



写 真 6 1 号住居址 溝・小穴

3~4 cmで1.8mの部分を認めた。周溝内や床面上に土器片（布留式期）を検出。住居址ベース面の層序関係から先の3棟より古いものと考えられる。住居址主軸はN50°E。以上の4棟の方向が概ね一致していることが注目される。

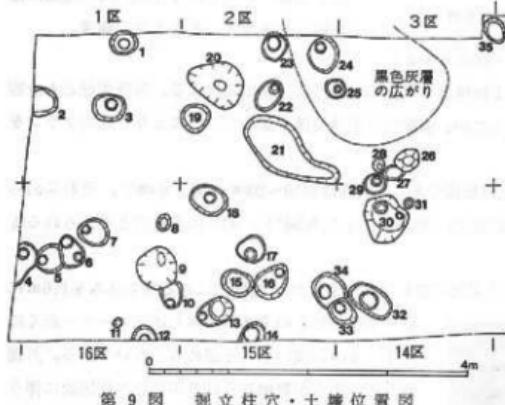
c 挖立柱建物（第7・9図・第1表・図版5）

発掘区の北半部において見い出された。柱穴の形状に相異が見られるが小範囲密集しているため、一棟を構成する柱穴相互の関係はつかめていない。掘立柱穴と見られるものは、22個を数える。柱穴の形状には円・椭円・隅丸方形及び不整形のものが認められる。大きさは概ね20~50cmくらいで、各々相異している。また、柱の太さは柱痕より径10~15cm大的なものと推され、その据えつけ位置は掘方の中央に置くもの、一方に偏するもの色々である。埋積土は灰褐色や黒褐色土で、いずれも

ベースは第Ⅳ層より掘り込まれている。以上の柱穴群中に互いに切り合うものも見られることからも數據が年時を経て建て替えられていたものと予想される。

d 土 壤（第7
・9図・第1表・
図版5）

1・15・16区で茶褐色土を埋土とする土壤（37・38・39）を検出した。全て形状は不整形で深さは約10cm程の浅い窪みである。埋土には比較的多くの土器片を含む。2区の20・21も同様である。3・4区東端及び13区東端にそれぞれ35・36を検出した。土壤35・36は第Ⅳ層より掘り込まれており、先のものに比べて明瞭で深い。36は深さ40cmを測る。いずれも性格は不明だが、36は下部が広がり気味



第9図 挖立柱穴・土壤位置図

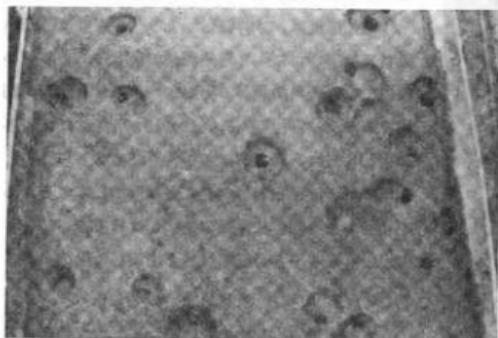


写真7 挖立柱穴群（1・2・15・16区）

第1表 掘立柱穴・土壤の一覧表

柱穴番号	大きさ(柱穴、柱径) cm	深さ cm	形 状	埋 積 土	位 置 (小 番 号)
1	32×37	13~14	円~橢円	黒灰褐色土	1
2	37×31以上	15	橢円形?	黒褐色土	1
3	34×42	15~16	開丸方形	黒褐色土	1
4	34×58	13~15	不整形	黒褐色土	16
5	36×38	12	円 形	黒褐色土	16
6	32×42	11	不整橢円形	黒褐色土	16
		14~16		黒褐色土	16
7	34×38	22	円 形	黒褐色土	16
8	18×22	5	円 形	茶褐色土	16
9	51×55	30	円 形	茶褐色土	16
10	28×34	10~11	不整開丸方形	黒褐色土	16
11	10×14	10~13	円 形	黒灰褐色土	16
12	30×18以上	13	円 形	黒灰褐色土	16
13	32×48	11	橢円形	黒褐色土	15
14	28×24以上	20~22	橢円形?	黒褐色土	15
15	31×42	5	開丸方形	黒褐色土	15
16	36×50	12	不整橢円形	黒褐色土	15
17	36×37	16	円 形	黒褐色土	15
18	36×46	14	開丸方形	黒褐色土	15
19	36×38	13	不整圓形	黒灰褐色土	2
20	52×72	10	不整形	黒灰褐色土	2
21	60×138	10	不整形	黒灰褐色土	2
22	28×42	12	橢円形	黒灰褐色土	2
23	31×34	17~20	開丸方形	黒灰褐色土	2
24	40×41	14~16	開丸方形	灰褐色土	2
25	24×26	10~11	開丸方形	灰褐色土	2・3
26	26×32	21	橢円形	灰褐色砂質土	3
27	20×27	14	橢円形	灰褐色砂質土	3
28	14×18	10	橢円形	灰褐色砂質土	3
29	24×30	13	開丸方形	灰褐色砂質土	3・14
30	56×60	15~16	不整形	灰褐色砂質土	14
		9~10			
31	12×14	16	円 形	灰褐色砂質土	14
32	35×58	24	橢円形	黑褐色砂質土	14
33	30×36	14~15	開丸方形	黑褐色砂質土	14・15
34	40×46	15~17	橢円形	黑褐色土	14・15
35	26×34		橢円形	黑灰褐色土	3・4
36	25×30	40	不整開丸方形 (但し、上部削平し) た後の形状	黑灰褐色土	13
37	186×65以上	10~16		茶褐色土	1・16
38	150×130以上	8~14		茶褐色土	16
39	135×54以上	10		茶褐色土	15・16
40	24×27	24	開丸方形	灰褐色土	13

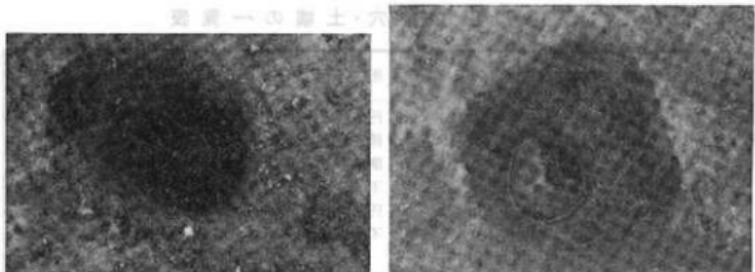


写真 8 柱穴 (13区)

写真 9 振立柱穴 40 (13区)



写真 10 振立柱穴 32~34 (14・15区)

になることからあるいは貯蔵穴のようなものかもしれない。

2・3区東側で約 $1.5 \times 1.5m$ 以上に広がり、最大層厚8cmを測る黒色灰層を検出した。層中より酒津式甕口縁部片（土器11）を探取した。

e 溝 (第7図・図版3・4)

発掘区の南半部において、北東から南西方向へN-50°-Eの走向を探る。幅約1.7~2.4m、深さ約30cm、長さ4.8m以上に亘る。ただ溝幅は東南方向に若干広がる。断面はU字形を呈し、河底面は既掘区内ではほとんど同じ高さである。堆積土は大きく二分される。上半分は白色砂の單一層で、粘土の薄層を挟んでより複雑な下層と区分される。両層からは土師器片に混じって須恵器片を含む。両層とも細片でかなり磨滅を受け、その量も少ない。堆積土の様相より復原してみると溝開掘後しばらく流水があり、一時期静水状態になり灰白色粘土層を形成させる(第22・23層間の粘土層)。その後、また溝が機能していたが、再び水流が衰え、第21・22層間に粘土層を沈澱させる。その上層、第21層が約15cmの厚さで溝内一面を覆う。この第21層

(砂層)は砂粒径が下層に比べてやや大きいことや白色の單一層で埋積されていることより、短かい期間により急速な流水により埋め尽くされたのであろう。掘り込み断面が整っていることや方向が一定していることより、人為的な掘り込み一水路であろうと考える。

溝底面で走向に並行して中央及び北岸にピット列を検出した。径約10~30cmの円形~精

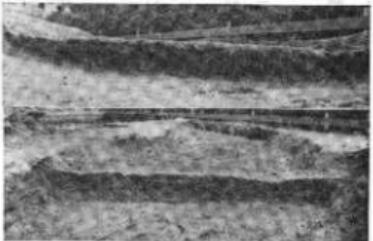


写真 11 溝埋積状況 上 f 断面・下 g 断面



写真12 溝・柱穴 (南西方向より)

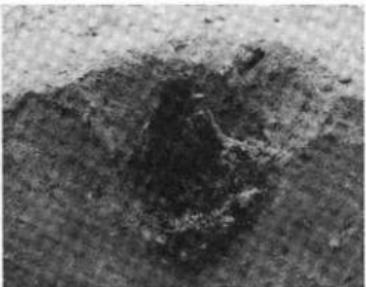


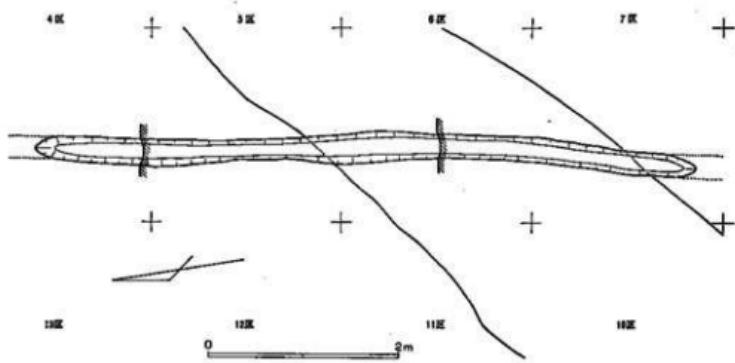
写真13 柱根 (6区溝底面検出)

円形のもので建物の柱穴あるいは棚列穴と考えられる。二箇所で木質を遺存した柱根を確認した。これらは発掘以前にかかる遺構であろう。

f 南北小溝 (第10図・図版4)

発掘区の東側に幅約20~30cm、深さ約3cmの浅いU字形の溝を検出した。3~7区の約6.8mにかけて確認することができるが、両端ではベースと区別できず消えてしまう。より上に伸びていたものが後の削平を受けたためと思われるが浅い溝であろう。走向はN-10°-Eでは南北方向を指す。溝内堆積土中より土師質土器の微細片を採取したのみで時期の判定は困難である。中世以降のものと想定しておく。走向からして条里地割に則られた水田に随伴した溝あるいは犁痕・鉢溝ではなかろうか。豊中市勝部遺跡・桜井市郷向遺跡などに類例を見る。

以上に挙げてきた遺構群を層序関係及び伴出遺物から前後関係を明らかにして見ると、河川の氾濫堆積物により遺跡地一帯の基盤が形成される(第X層以下)。正確な形成の時期は分らないが、遺跡の上层が弥生時代にまで溯ることよりこの時期以前と考えられる。→ある時期、付近が河川の後背湿地となり、アシなどの水生植物が繁茂していたのであろう(第Ⅴ層)。人間の活動がすでに始まっており、漂着した堅杵一点(第17図)が出土した。弥生時代に属するかもしれないが、伴出遺物がないため決め難い。→その後、第Ⅳ層を覆って河川形成の砂・粘土の互層が堆積する。今回の最古遺構群のベースとなるものである。(第Ⅹ層)→8区の3号住居が構築される。住居内周溝及び床面より布留式の土器片が出土した。小片のためより細かな時期は判じ難い。→調査区中央部で(4→1+2)号住居が營まれる。住居廃棄後、削平などの造作が中央部より以北の区域で加えられる。→調査区の北部で掘立柱建物群が建造される。→浅い不整形の窪み(土壤)ができる。周辺より流れ込んできた土器包含層が二次的に堆積する。須恵器を伴わぬ段階のもの。→その上を須恵器を混じえた遺物包含層が発掘区内全面を覆う。(第Ⅳ層)→南部を横断する溝が開拓される。溝内は中位の粘土薄層を介在して上下の砂層に区



第10図 南北小溝

分される。開掘当初は相当の水量があったものと察せられるが、一時期滯水状態となり溝の機能が低下したようである。その後、短時期のうちに埋めつくされてしまったのだろう。下層より土師器細片と共に6世紀代の須恵器片が併出しているので、この時期に掘り込まれたものであろう。また、同じ6世紀代には閉溝したと考える。→南北方向の小溝が掘られる。→調査区は全城白色砂を被る。須恵器片・土師器片に加えて、土師質小皿片・瓦器片・陶器片(備前焼)を含むので中世の河川氾濫によるものであろう。

B-7地区

本地点は遺跡の範囲全体から見ると南西部の一画に相当し、その限界を把える目的をもって実施した。

基本的層序 (第11図・写真14)

各土層の厚さに若干の違いはあるものの、調査区内はほぼ同様の層序を構成している。
すなわち盛土下、旧水田面より耕作土層 (I層) → 灰褐色粘土層 (II層) → 遺物包含層 (III・IV層) → 自然層 [沖積層] (V層) とに大別される。以下、各層ごとにその特徴を見ると、

第I層は層厚約18~25cm。第II層は下層の第IV層と同質のものであるが、より濃い色調を呈し区分した。茶褐色粘土層。土師器を微量に含む。上面で標高0.8m。

第IV層は炭粒を微量ながら含む。また、植物片をも含むが、特に第V層との境界付近に層状を成す。淡茶褐色粘土層。土器の出土は見られないが、杭片・製材された木片を混入させる。

第V層はシルト質の土層で植物片を微量混じえる。土器など遺物の出土はない。上面位で湧水を生じる。標高0.5m。土質は割合しまっており、他地点での遺構形成のベースに対応するものである。付近に遺構の存在を予想することができる。以上、各層が成層状態で堆積している

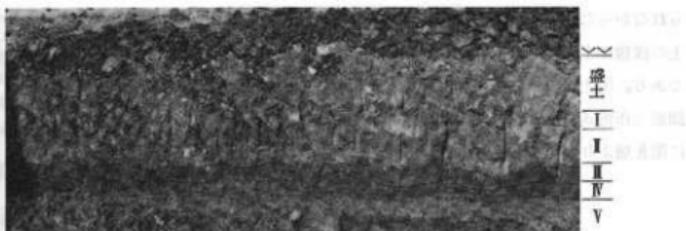


写真 14 B-7 地区発掘横断面

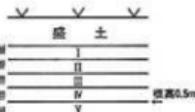
所を見ると比較的穏やかに、特にⅢ・Ⅳ層から後背湿地の状態に永くあったことが窺える。

各層において明確な造構を検出することはできなかった。出土遺物は第Ⅲ層より土師器数点、第Ⅳ層より下層で杭・丸木・木材片、上層で桃核 1 点を採集したのみにとどまる。

次いで土層の様相から、造跡の形成過程を辿って見



第 12 図 丸木杭・木片出土状況
(18区Ⅳ層)



第 11 図 層序関係模式図

ると、先ず第Ⅴ層の青灰色のシルト層はこの地域一帯が河川の氾濫原となっていた近傍に堆積したものであり、第Ⅳ層の時期には付が湿地化し、水生植物の繁茂していた様子が窺える。出土した丸木杭・木片等は標示したまま堆積したものであろう。後述するように同敷地内で試掘した箇所でもこれらに近接した地点で杭・木製容器・木片等が同様の状態で出土している。第Ⅲ層の時期でも同じような景観を呈していたようである。

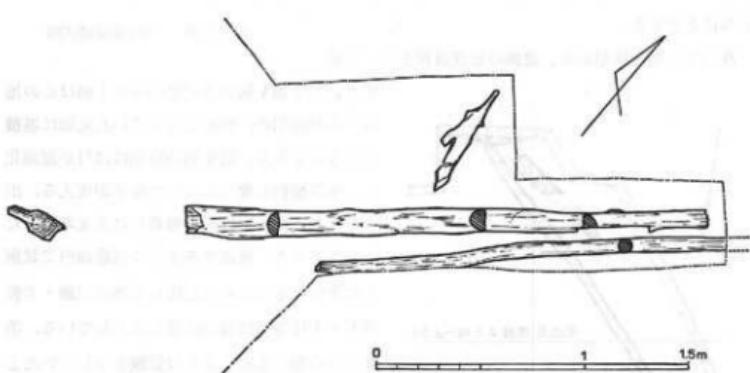
先の第Ⅴ層が造構のベースとなりうるような土質を持っていることから付近に集落を構成する造構が予想され、ほぼこの C-7 地点が南西眼の一画を占めているものと判断される。また、付近から集落に付随した水田址等の検出されることも充分考えられる。

同敷地内で昭和52年12月に試掘調査を行っているので簡単に結果を記しておく。造構は認め

られなかったが、各境内で土器・木器片を若干検出した。出土の様態は上記のものと同様、湿地に標着して堆積したものである。出土した木片類が同方向をとって出土している。土師器（布留式）はⅢ層、木器（鍔・木製容器）・丸木片は主に第Ⅳ層より出土した。



写真 15 B-7 地区発
掘区全景



第 13 図 木器出土状況 IV 層（試掘調査）

第5章 出土遺物

C-5 地区

出土した遺物は、弥生時代後期～古墳時代前期の土器が大半を占め、古墳時代須恵器・奈良時代の土師器・中世の土師質土器・瓦器・須恵質土器片が少量、石製品として勾玉1点、磨製石器片1点、木製品としては堅杵1点や木片も若干出土した。出土土器は、発掘区北部域の第Ⅳ～Ⅶ層中からのものがほとんどである。その上、二次的堆積により形成された層のため、そのほとんどが10cm四方以下の微細片に至るもので相当磨滅の著しいものも含まれ、復原可能で図示できるものが極めて少ない。全体的に出土量は少ないといえる。又、B-7地区では出土遺物が極く僅かで、杭片と桃核について本節内で記述した。

a. 弥生時代後期～古墳時代前期土器（第2～5表）

1. 壺形土器（第14図12・13、図版11）

この器種に属するものは、数少なく図示できたのは2例のみである。大きく聞く口縁をもつ12は口縁先端下に粘土を貼り付け、その外面に櫛描波状文・竹管円形浮文で加飾する。13は肩部に刺突文帯と櫛描波状文1帯、直線文1帯という文様構成をとる破片。

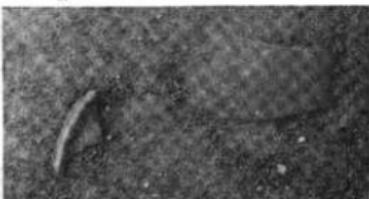


写真16 土器（12・13）出土状況（12区）

2. 壺形土器（第14図1～11、図版10・11）

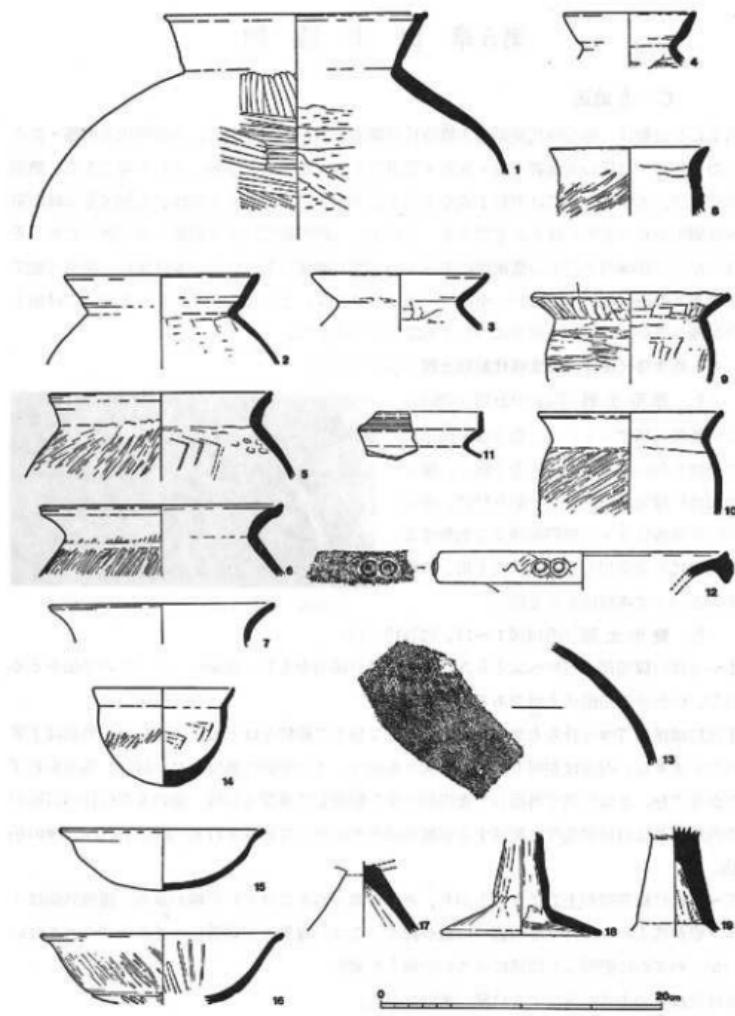
1～4は口縁端部が内側へふくらみ、内側向けの端面をもち、内面へラケズリの手法をとるもので、いわゆる布留式土器である。

1は口縁径18.7cmを計る大型品。極めて精良な胎土で砂粒をほとんど含まない。外面は丁寧にヘラミガキし、内面は左回りのヘラケズリを施す。くの字形に外反した口縁で、端面がわずかにがら座む。2は腹部で外反して後内側へ少し屈曲して伸びる口縁。他のものに比べ口縁がやや肉厚。3は口縁部先端は肥厚するが端面は外側に向って形成される。4は口縁径8.5cmの小型品。

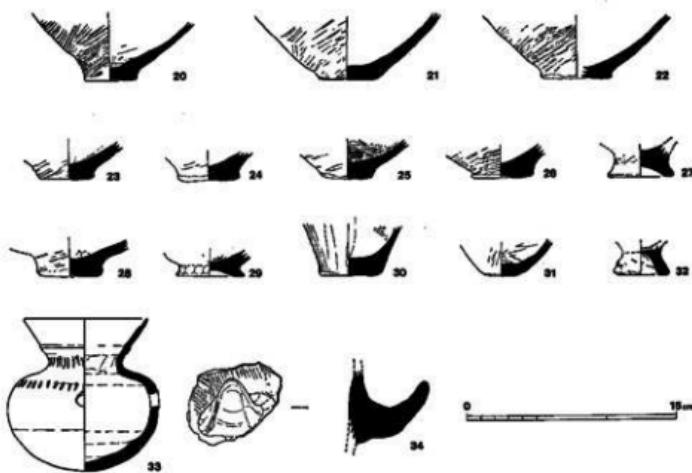
5～7は口縁先端が上方に立ち上がり、その外側の端面には脛い凹線が巡る。腹部外面はタタキメ痕が残る。5は外反度の弱い口縁が付く。7は口縁先端が顕著につまみ上げられてはないが、わずかに肥厚した端部にゆるい凹線文を刻む。

8は先細りの小さく外反する口縁。器肉は厚い。

9は口縁径が腹径を上まわる器形。口縁外面にユビナデ痕が残り、腹部には粘土紐接合痕が明瞭に残る。タタキメ痕は水平方向である。内面は口縁・腹部とともに左回りのヘラケズリが行われ、その後ナデ消される。全体に調整が粗雑。



第 14 圖 土 器 斷 刻 圖 (1)



第15図 土器実測図(2)

10は口縁径と最大腹径とがほぼ等しい器形。腹部外面はタタキ手法により、内面は縦方向のナデによる仕上げ。11は直立する口縁外面に横描直線文帯と凹線文を配したもの。酒津式。

3. 鉢形土器 (第14図14・15、図版10)

14は球形の体部に短かく外反する口縁が付く。体部外面はタタキメ後ナデ消される。内面は左方向のヘラケズリ調整。大和の纏向・布留遺跡、河内の上田町遺跡出土例などに類例を見る。図示しなかったが、同形式のものが数個体出土している。

15は口径14.7cm、器高4.4cmを測る底が浅く、大きく口の開いた器形。

4. 高杯形土器 (第14図16~19、図版11)

16はゆるやかに内変しながら、小さく外反する口縁をもつ杯部片。下半部は横へ短かく広がるのみで上半部が大きく杯部の大半を占める。上半・下半部界に一条の凹線を巡らし、それぞれに、また内面にも約1~3mm幅の階文風のヘラミガキを加える。

17は直線的に裾びらきする脚部上半の破片。

18は中空の柱状部に直線的に小さくひらく裾部をもつ高杯。杯部欠失。外面はヘラミガキ、内面は柱状部でヘラケズリ、裾部でヘラミガキ後ヨコナデ調整により仕上げる。無孔。軟質。良質の胎土。

19は肉厚のひらき気味の中空柱状部。軟質。砂粒を含み、やや粗い胎土。

5. 底部一括 (第15図20~32、図版11)

径2.4~4.9cmで、そのほとんどは平底のものであるが凹底をなすもの、あるいは小さな脚台

をつくり出したものなどがある。壺・鉢・壺形土器などの底部片である。底部より器種を判別するのに難しいものが多い。

20～27は外面にタタキメを残すもので、おそらく壺形土器の底部であろう。20・26は底面中央がわずかに窪む。21・25の底面には粗痕が印されている。27は外方に小さく突き出した脚台をもつ。底面にヘラ痕が残り、搔き取って凹底としたものだろう。

28は底面中央がわずかに窪み、29は小さな脚台を取り付けたもの。接合部外面には指頭圧痕が残る。共に壺形土器と思われる。

30は外面が幅7～8mmの縦方向のヘラにより面取りされている。平底。

31は丸味をもった底部だが、約2.4～2.7cmの小さな平底部をつくる。成形にはタタキ手法によったことが後に施されたナデ消し痕の間に認められる。内面には粘土紐の巻き上げ痕が残る。

32は径4.0cmの裾広がりの脚台部。外面は末端近くまでタタキメ成形され、その後を指圧痕が巡る。全体的に表層の剥脱が激しく、砂粒を多く含む。淡赤褐色～淡灰褐色。実地の比較は行っていないが、和泉出土の資料との類似から製埴土器の可能性のあるものと考えられる。その場合、酒井氏のⅦ類に近いものと思われる。他に15区出土のもので腹部片1点が可能性のあるものとして挙げられる。外面タタキメ内面ナデ、器厚1～1.5mm、淡赤褐色～淡灰褐色で内面は淡灰褐色・器肉は黒色を呈す。胎土良質で軟質の細片である。

b. 須恵器 聰（第15図33、図版13）

腹径が口径を凌駕し、器高とほぼ等しい器形。最大腹径は体部中央よりやや上に位置する。口縁部は、頸部から外反して後わずかに屈曲して斜め上方へ開く。頸部と肩部に各々一帯の横描列点文を右回りに施す。底部外面はナデにより平滑にし、他はヨコナデにより調整される。胎土は緻密、良質で焼成も良好。淡灰色を呈する。第I期TK208型式。

c. 土師器 把手（第15図34）

先細りの屈曲した肉厚の把手である。体部は粗いハケメ調整が施される。焼き上がりは良く、淡褐色を呈する。奈良時代以降の壺や壺形土器あるいは壺形土器に付いていたものであろう。

以上に記した土器類中、弥生式土器～古墳時代前期のものについて他の土器片をも合せて共通する特徴を2、3挙げておく。

1. 少片・磨滅したものが多い。→遺物包含層が二次的に堆積したものが多く、付近にこれらの土器を隨伴した遺構群があるものと思われる。
2. 出土土器は、1・3・15・16区に集中する。
3. 器種は壺が主体を占め、壺・鉢・高杯等は少ない。
4. タタキメの手法をもつもの。右がりで1.5条～4条/cmで粗く太いものが多く、2～3条/cmが大多数を占める。いわゆる庄内式の壺形土器のような細かいものは見受けられない。
5. 色調は、淡灰褐色～淡赤褐色を呈すものが量的に多い。次いで少量の淡茶褐色のもの。

茶褐色のものは、壺(外面ハケメ、内面ヘラケズリ・ナデ)に多い。但し、中河内特有の胎土をもつたものは見当たらない。

6. 器厚は薄いもので3mm程度のものよりある。

7. 胎土は、砂粒を若干含むものが多い。1mm大くらいのものがほとんどで、2~3mm大のもの、雲母

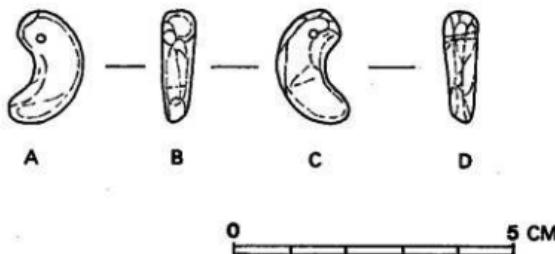
片を含むものもある。中には淡赤茶褐色の精良な胎土のものもある。

8. 焼成は、軟質のものが多い。

この他、注意すべきもので図示できなかったものを掲げておく。

15区IV層より1点布目压痕の印されたものが出土した。約2×3cmの土器片で器種は不明。片面に見られる。糸の密度は5mm間に7×7本のものと7×9本のものがある。土器面に剥落が認められるものが6例ばかりある(第6表)。

古墳時代後期の須恵器片が、少量出土している。主に第III層(白色砂層)や第VI層それに溝内より採集されたもので、杯の蓋・身、壺、高杯、提瓶などの器種が見られる。いずれも6世紀中葉~後半の時期を指し示すものである。



第16図 石 製 勾 玉

d. 石 器

石製勾玉 (第16図、図版13)

最大長2.0cm、最大幅8.5mm、最大厚5.5mmを測る。重量2g。研磨面が全体に見られ、擦痕が各所に認められる。製作時での研磨の結果によって生じたものであろう。A面では斜め(右上

番号	大きさ (長さ・幅)mm	部位	備考
1	6.5×4.5	底部	土器番号21。 1は扁平に、2は斜めについた圧痕。 頬溝が識別できる。
2	6.5以上×	外面	同面には他に不明の圧痕がある。
3	6.8×5.2	底部	土器番号25。 3は扁平に、4・5は斜めについた圧痕。 頬溝が識別できる。
4	4.8×4.0	外面	
5	5.5?×3.0	腹部	壺破片(外面ハケメ、内面ヘラケズリ・ナデ手法)。3号住居床面出土。 扁平についた圧痕。頬溝が識別できる。
6	6.8×4.2	外面	胎土中にあったものが焼成時にはじけ出たもの。粗度の四方1.5cmに凹くはじけられた痕が残る。

第6表 剥落の計測値

第III層(白色砂層)より土師質小皿片、瓦器片、陶器片(備前焼、摺鉢など)が微量出土した。他に出土層位不明の黒色土器片がある。

り) 方向の、B面では横方向の、C面では尾部が斜め(左上り)で他は縦・横方向の、D面では一面にのみ斜め(右上り)方向の擦痕が認められる。A面の孔付近は粗く、C面の孔付近は細かい。孔は両面から穿たれ、中央で貫通する。孔径は、外面で約1.5mm、研磨後穿孔する。淡褐～淡灰褐色。材質未同定。滑石製であろう。層出土。

磨製石器(図版13)

3×5cmの残欠で、おそらく磨製石斧の刃部に近い破片であろう。緑黒色の基質に灰白色の鉱物が混じる火成岩。16区土壤38内より出土。

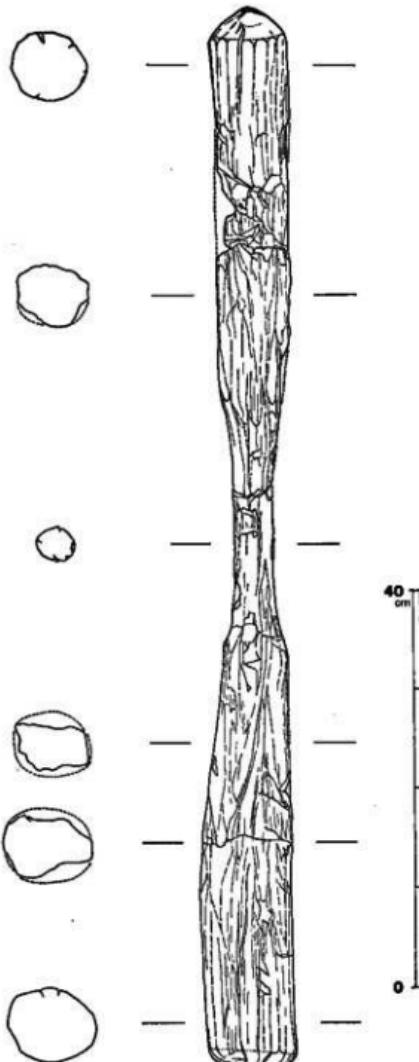
その他、淡青緑色のチャート片(1.3×2.2cm)1点を採集した。

e. 木製品

堅 杵(第17図、図版

13)

全長167cm、最大径9cm、中央部径3.9cmを測る。6・7区第17層出土。(第21図)植物堆積層中に包含されていたこともあって表面は朽ちてすり減っており、全体に腐蝕が進んでいてスponジのようにブヨブヨになっており遺存状態は良くない。表層には砂粒が若干くい込んでおり、漂流の末堆積したことを物語っている。材質は未同定。円柱形の体部に中央部分を細く削り込んで把手部としたもの。



第17図 堅杵

番号	大きさ (長さ・幅・厚さ)mm	出土・地区・層位
1	23.0×18.5×15.0	C-5地区、16区Ⅶ・V層。完形。
2	21×2×19	C-5地区、IV層。半欠。
3	—	C-5地区、15区Ⅶ層。小片。
4	21.5×18.5×16.5	B-7地区、18区Ⅶ層。完形。

第7表 桃核の計測値

時の工具切削面が見られ、稜線を残す。特に両端部分や中央の把手部に顕著に認められる。先端部分は、一方が円錐形を示すのに対し、他方はゆるい半球形を形成している。後者の形状は使用により磨耗したとも考えられるが、粉砕される物や段階に応じて二様に造り出したのかもしれない。

丸木杭(第18図、図版13)

B-7地区、18区Ⅶ層出土。全長55cm以上、径7cmを測るものであるが、腐朽が進行していただけ、取り上げ時に壊れてしまった。丸木の一端を削り落としただけのもの。ただ、腐朽化を防ぐためか加工後火入れをしてあり表層は炭化し黒色を呈す。

切削面が不明瞭である。

f. 植物遺存体 桃核(図版13、第7表)

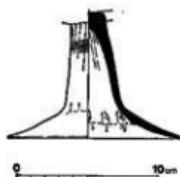
C-5地区で3個、B-7地区で1個出土した。

B-7地区試掘時出土遺物

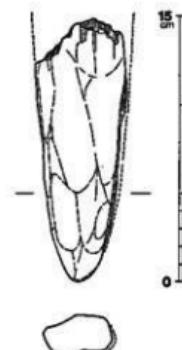
a. 高杯形土器(第19図)

脚柱部。中空の柱状部より裾部へゆるやかに移行する形態。外面は柱状部に継方向のヘラミガキで仕上げ、上端には杯部の剝離痕が残る。脚柱部上端に粘土紐を巻き上げて杯部を形成したものだろう。その下1cm程の所にヘラ描条線一帯がある。内面にはシボリメをとどめる。胎土は良質だが、軟質のため全体に表面磨耗し、脆弱である。胎土は良質だが、軟質のため全体に表面磨耗し、脆弱である。

第Ⅰ層出土。



第19図 高杯形土器
(試掘時出土)



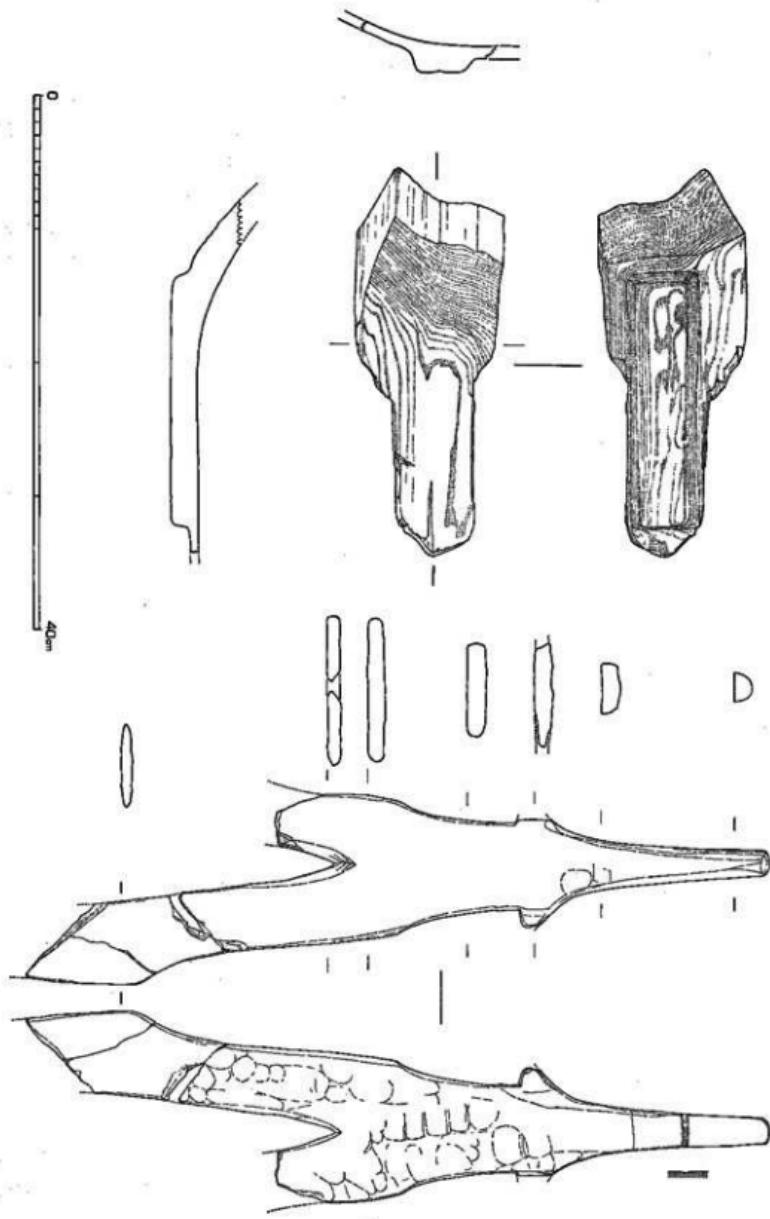
第18図 丸木杭

b. 木製品(第20図、図版14)

着柄鋸

現存長55.9cm、最大幅18cm(但し復元長)、最大厚15mmを測る。片面(B面)は平坦で、他面(A面)は端部に面取りを施す。横断面は着柄部でカマボコ形、以下扁平になる。厚さは着柄部より中央部にかけて厚く、鋸先部分では約8mmくらいに薄い。B面にはチョウナによる切削痕が多く残り、A面には樹

第20圖 木質管器・紫樹



皮の一部が削り残されている。B面の基部には幅3~5mm、深さ1mmの小溝が刻まれている。柄との着装を容易にするための工夫とも見られるが、平粗面の方に刻まれているのは解しがたい。本例は刃部が鉄器化されていないもの。

木製容器

現存長29.7×11.2cm、現存高5.3cmを測る。原木を縦に割裁し、その裁断面を器の上面として割り抜いたもの。外皮側に突出した脚を造り出す。その削り出された四角い脚(19.5×5×1.5cm)は、1個のみをとどめているが、4個以上付いていたものであろう。器壁は短辺側の方が厚く2cm強、底部は1cm弱を測る。容器の深さ3cm以上あり、全長30×70cm以上のものであったと復元できる。又、内外面とも表面は黒く炭化している。腐蝕を防ぐための工夫かあるいは被災し火を受けたとも見られるが、本品はその後壊れて現在の状態になったもので割れ口は炭化していない。

その他土師器片、黑色土器片、土師質小皿片を採取した。

第4表 土器一覧表

番号	器種	法量(cm)	形態・手法	色調・胎土・焼成	出土小区 (出土層段)
1	甕	口縁径 18.7cm	大型品。 外面一肩部タテ方向のヘラミガキ(幅5mm)、 以下ヨコ方向のヘラミガキ(左→右)。 内面一左回りのヘラケズリ。 口縁部は内外面ともヨコナデ。	灰褐色。部分的に赤 味を帯びる。極めて 精良。砂粒をほとんど 含まない。	3区 IV・V層
2	甕	口縁径 13.9cm	頸部で外反して後、若干内傾する口縁部をもつ。 内面一腹部ヨコ方向のヘラケズリ(右回り)。 口縁部は内外面ともヨコナデ。	灰褐色。長石の微細 片を多く含む。	15区 土壤39
3	甕	口縁径 12.7cm	内傾しながら外反する口縁部をもつ。口縁端 は上方へ若干肥厚する。 内面一腹部ヨコ方向のヘラケズリ(右回り)頸 部下に左回りのユビ押さえ痕。 口縁部は内外面ともヨコナデ。外面にスス付 着。	外面一淡黄褐色。 内面一口縁部、淡茶 褐色。腹部、 淡灰褐色。 砂粒を含む。 焼成良好。	IV層
4	甕	口縁径 8.5cm	内傾気味に外反する口縁部をもつ。頸部は内 側に小さな面をつくる。 内面一腹部、左方向のヘラケズリ。 外面にススの付着。	外面一淡茶褐色。 内面一淡茶灰~淡茶 褐色。 1mm以下の大砂粒を 含み、焼成良好。	16区
5	甕	口縁径 15.9cm	口縁部の外反は強く、先端部で再度小さく外 側へ屈曲する。 内面一腹部タテ方向のヘラ度が残り、ヘラケ ズリされたかもしれない。頸部には粘 土の接合痕が残り、その下にユビ押 え痕が見られる。 口縁部も含めて内外面ともヨコナデされ、外 面腹部のタクキメをナダ消されている。	淡灰褐色。 砂粒を含み、軟質。	1区 V・VI層

6	甕	口 線 径 17.4cm	頸部で外反して後、口縁先端部は、わずかに斜め上方へ屈曲する。 外面一腹部、右上がりのタタキメ(右回り)が残る。 内面一頸部下は表面剥離のため調整度不明。	外面一淡赤褐色～明灰褐色 内面一明灰褐色 側面は赤褐色。 砂粒を含む。軟質。	16区 V・IV層
7	甕	口 線 径 16cm	ゆるやかに外反する口縁部。 端面にはゆるい凹線文が残る。 口縁部外面ともヨコナデ。	淡黄褐色～淡赤褐色 2～3mm大の砂粒を含み、軟質。	16区 V・IV層
8	甕	口 線 径 11.4cm	頸部ですばまって後、わずかに外反した先端の口縁部をもつ。 外面一タタキの手法で成形。	淡灰褐色。 器肉は淡赤褐色。 軟質。	15区 IV層
9	甕	口 線 径 14.2cm	口縁部が底径を後ぐ彎形。 外面一口縁部にユビによるタテ方向のナデ痕、腹部には粘土紐の接合痕が残る。 ヨコ方向のタタキ手法で成形しその上にハケメ痕のようなもののが残る。 内面一口縁部までも左回りのヘラケズリがされ、その後ナデ消される。	淡茶灰色～淡茶褐色。 口縁部・腹部の外面の一部にスス付着。 2mm大の砂粒を含む。	4区 IV・VI層
10	甕	口 線 径 13.3cm	ゆるく外反した口縁部はその先端を丸くおさめる。 外面一腹部右上がりのタタキメ。頸部を除いてスス付着。 内面一タテ方向のナデにより仕上げられる。 頸部には内外面とも粘土紐接合痕を残す。	外面一淡赤褐色。 内面一淡黄褐色。 軟質。	16区 土壤37
11	甕		くの字形に外反して後、直立するもの。立ち上がった外面(幅8mm)に6条の櫛状直線文、その上先端部下には凹線文を1条巡らせる。 腹部は右回りのヘラケズリ。酒津式。	灰褐色。 微砂粒を含む。	3区 黒色圧層
12	甕	口 線 径 20.4cm	著しく磨滅しており、手法は不明な点が多い。 口縁部先端下に粘土を付加し、端面の拡大を企り、そこに櫛状波状文1帶を巡らせ、竹管文の印された円形容文を2個1組で貼り付け装飾したもの。	淡赤褐色。 軟質。	12区 IV・VI層
13	甕		腹部(肩部)片。平滑な器表に1mm大の刺突文帯とその下に2帯の波状文それに1帯の直線文という文様構成をとるもの。 内面はヨコ方向の細かいハケメで調整。	外面一淡黄褐色。 内面一淡墨灰色。 軟質。 2～3mm大の砂粒を多く含む。	12区
14	鉢	口 線 径 器 高 7cm	球形の腹部に短かく斜め上方に外反する口縁部をもつ。丸底。 外面一腹部タタキメ痕のち、ナデにより消されている。 内面一腹部左方向のヘラケズリで調整。 口縁部はヨコナデにより仕上げる。器厚は底部が約1cmで他は約2～5mm。	淡黄褐色～淡灰褐色 1mm大の砂粒を含む。	13区 IV層
15	鉢	口 線 径 14.7cm 器 高 4.4cm	底の浅い器形。ゆるく短い口縁部がつく。 全体に表面が減滅していて、調整手法などは不明。	灰褐色。 内面は部分的に赤味を帯びている。	15区 IV層

16	高杯	口 線 径 17.2cm	杯部片。ゆるく内寄ながら立ち上がり、口縁先端部は小さく外反し丸くおさめる。 杯部の下位、脚との接合部近くに1条の凹線文を刻む。 内外ともヘラケズリの後、約1mm～3mm幅の暗文風のヘラミガキで飾る。但し、外面凹線文下はヘラケズリしない。凹線文を境にしてヘラミガキを分けて施す。	外面一淡灰黒色～淡 灰褐色。 内面一淡茶灰色。 軟質。	3区 Ⅳ層
17	高杯		脚部上半の破片。ゆるく壺開きする器形。内 外面とも磨減のため調整手法は不明である。	外面一淡灰茶色。 内面一赤味を帯びた 淡黄褐色。	Ⅳ層
18	高杯	裾 部 径 11.4cm	脚部片。上端を欠く。聞き気味の中空柱状部 に大きく聞く痕跡がつく。 外面一柱状部と裾部界にユビの押さえ痕が残 る。それを境に柱状部でタテ方向の裾 部では斜め方向のヘラミガキが施され る。 内面一柱状部上端で右回り、以下左回りのヘ ラケズリ。裾部はヘラミガキのちヨコ ナデにより仕上げる。無孔。	淡灰褐色、局部的に 淡茶褐色。砂粒を若 干含むが全体的に良 質の胎土。 軟質。	1区 土壤37
19	高杯		脚部片。肉厚のもので中空の柱状部。 外面一平滑に仕上げられる。 内面一シボリメを残す。	淡黄褐色。 1mm大の砂粒を比較 的多く含む。	Ⅳ層
20		底 部 径 3.8cm	底部中央がわずかに窪み。 外面一右回りのラセントタキ痕が残る。下端 部にユビの押さえ痕が残る。 内面一ヘラ痕がラセン方向に残る。平滑に仕 上げる。	外面一茶褐色。底部 のみ赤褐色。 内面一淡茶灰色。 器内一赤褐色、淡茶 褐色。 2mm大の砂粒を比較 的多く含む。	Ⅳ・Ⅴ層
21		底 部 径 4 cm	外面一ラセントタキメ痕。 内面一ナデ仕上げ。 底面に粗痕が押印されている。	外面一淡黄褐色。 内面一淡黄褐色～淡 茶褐色。	Ⅳ層
22		底 部 径 4.8cm	外面一タタキメ痕。 内面一ナデ仕上げ。	外面一淡褐色。 内面一淡赤褐色～淡 黑褐色。 砂粒を含む。 軟質。	1区 Ⅳ・Ⅴ層
23		底 部 径 4.0cm	外面一ラセントタキメ(右回り)。 内面一ヘラ痕が左回りに残る。 底面平滑。平底。	外面一茶褐色～暗茶 褐色。 内面一淡黄褐色。 2mm大の砂粒を多く 混入。粗。焼成良好。	Ⅴ層
24		底 部 径 2.4cm	外面一タタキメ。 内面一黒色有機物が付着。	外面一灰褐色～淡赤 褐色。 内面一淡黑褐色。 軟質。	1区 Ⅳ・Ⅴ層
25		底 部 径 3.6cm	外面一タタキメのちナデ消し。黒斑が見られ る。 内面一ハケメ(左回りに下から上へ6.5本/cm) 調整。 底面に粗痕が押捺されている。	淡灰褐色。 2mm大の砂粒を多く 含む。 焼成良好。 黒斑が底部外面から 腹部下まで残る。	16区 Ⅳ・Ⅴ層

26		底 部 径 4.3cm	外面一タタキメ 内面一ヘラ痕残る。ナデにより仕上げられる。 底面は凹底。	外面一黒褐色。 内面一黒褐～灰褐色。 器内は灰白色。2mm 大の砂粒を含む。 軟質。	16区 土壤37
27		底 部 径 4.7cm	裾広がりになる脚台となる。 底面に左回りのヘラ痕が残り、擦き取って凹底としたもの。 外面にタタキメ痕が残る。	淡黄褐色。 1～2mm大の砂粒を 含む。	Ⅳ層
28		底 部 径 4.7cm	外面一タタキメ。 内面一右回りの細かいハケメが施され、後タテ方向のナデにより仕上げる。 底面一浅い凹底。	淡赤褐色。 底の器内は赤褐色。 2mm大以下の砂粒を 多く含む。 軟質。	Ⅴ層
29		底 部 径 4.9cm	裾広がりの脚台を取り付けたもの。凹底。 外面一ユビ押され痕が残る。 内面一ヘラ痕が残る。	灰褐色～暗灰色。 多量に砂粒を含む。	16区
30		底 部 径 4.4cm	外面一ヘラにより下から上へ右回りの方向へ 7～10mmくらいの幅で斜方向に面取りする。 平底。	淡明灰褐色。 1～2mm大の砂粒を 含む。軟質。 外面に黒斑が見られる。	16区 V・VI層
31		底 部 径 2.4～ 2.7cm	底部から丸く内湾しながら最大腹径部へ至る。小さな平底をもつ。 外面一タタキメ後ナデ消される。 内面一底面にラッセン状に粘土紐の接合痕が残る。ヘラ痕もラッセン状に残る。	淡灰褐色。 器内一赤褐色。 2mm大の砂粒を含む。 焼成や良好。	16区 土壤37
32		底 部 径 4.0cm	裾開きの脚台部。 外面一タタキメ後ユビによる押さえ痕が巡る。 全体に表面の剥脱が激しい。	外面一淡赤褐色～淡 灰褐色。 内面一淡茶褐色。 器内一淡赤褐色。 砂粒を多く含む。	1区 土壤37
33	縁	口 線 径 8.8cm 器 高 11cm 最大腹径 10.8cm	上半部に最大腹径をもつ。器体に斜め上方に開く口縁部をもつ形態。口縁部は腹径を越えない。 外面一頸部と肩部に梯描列点文一帯を右回りに施す。体部下半は、ナデにより平滑。他はヨコナデ調整。 内面一ヨコナデ。頸部はナデ。	淡灰色。 緻密、良質。 焼成良好。	3区 Ⅳ層
34			把手。器体に先細りの把手を屈曲させて付け、その後粗いハケメ(5本/cm)で仕上げる。	淡褐色。 1mm以下砂粒を 含むが、2～4mm大の ものも微量混じる。 焼成良好。	Ⅳ層
第 四 高杯		脚 部 径 11.9～ 12.25cm	脚部片。中空の柱状部にゆるやかに開く裾部をもつ。 外面一柱状部は約6mm幅のタテ方向のヘラミガキで仕上げ、上端近くで約1mm幅のヘラ描え継が斜め方向に9mm以上に亘って巡っている。 内面一シボリメ。裾部と柱状部の境界下には指圧痕が、その下にはヨコ方向のハケメ痕が残る。全体に表面磨減し脆弱。	外面一淡赤茶褐色。 内面一淡茶褐色。 微量に砂粒を含むのみで良質。軟質。	B—7地 区試掘時 に第Ⅱ層 より出土

第6章 まとめ

今回発掘した面積は、C-5 地点で約85m²、B-7 地点で約96m²と小さく、C-5 地点では遺構の検出があったにもかかわらず、それらの全掘ができなかったため、遺構全体の様相・性格を理解する上にも制約されることが多い。ここでは、前章で記した事柄を簡単にまとめておく。

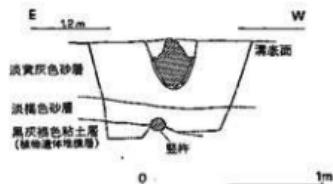
先ず、C-5 地点では古墳時代前期の竪穴式住居址 4 棟・掘立柱建物 2 棟以上を検出した。住居址は、伴出遺物がほとんどなく、決定的な年代を下すことが難しい。しかし、それらの内で層序的に最も古いと考えている 3 号住居址から床面と溝中より布留式の土器片を 18 点見い出した。1・2・4 号の各住居址は相近接していることから同時に存在したというよりも時を追って改築あるいは新築された結果と考えている。平面の形状は方形のプランを取るものと思われるが、周囲に示されるプランの主軸がほぼ揃っていることが注意される。つまり、一定の方向に整然と建て込まれた住居群が建て替えを行っていたものと考えることも可能であろう。住居廃絶後、一帯が造成され削平を受けたようである。(第7 図断面図) 調査区の北側で検出された掘立柱穴は、竪穴式住居群と同時期あるいは以降の建造に係るものであろう。掘立柱穴は約 22 個確認した。しかし、区域内では柱穴間を結んで一棟分を復元することは難しく、2 棟以上構築されていたと推定されるのみである。柱穴 32 より布留式の土器片 2 点を採取した。また、6~11 区で溝底にかかる部分でピット列を検出した。これは、先章でも述べたように一応多くは溝に付随した遺構とは考えない、それ以前のものと想定している。柱根と思われる木片が 2 虢所で出土した。

調査区南半で斜めに継ぐ古墳時代後期の溝を検出した。幅約 2 m、深さ約 30 cm で人工の水路と思われる。

以上の遺構群を遺跡全体から既に発見されている遺構群と合せて概括し位置づけてみよう。遺跡は昨年度の成果やその後の試掘結果より、北西~南東方向に主軸をもつ 300×500 m の稍円形の規模を有することが予想されている。(第 1・2 図)

住居址はすでに C-8 地区で竪穴式住居址と掘立柱建物がそれぞれ発見されている。古墳時代前期のものである。今回の発見によって遺跡の北東部の一画にも同時期の居住域のあることが判明し、集落の構造的理縦にとって重要な要素となりうるものである。

昨年の調査地点 C-7 で発見された 9 m 以上に亘る奈良時代の河川の流路は、丁度遺跡を継続したような位置にあり、C-8 で発見された奈良~平安時代の河道もその流れに準じ、あるいは支流と考えるべきもので、今回の古墳時代後期の溝は時期を異にしているが、その走向が



第 21 図 柱根の出土層位(6+7 区)

それらの自然流路に直交する位置にあることである。つまり、遺跡東方を流下する糸田川系の流れも考えられるが、溝そのものが整っていることからも自然流水に関したものでなく、人工の水路で集落内を導水するため巡っていたものと考えられる。これは溝内下層が重層した砂の堆積であることからも窺えるもので、約30cmと浅いが単なる区画等の役割のみを担ったものではないと考える。集落内を縦横に走る自然流路や水路、それに施された護岸や堰の巡る中に住居群が建造されている光景が基本的な集落像であろう。

次いで、出土遺物に目を転じてみよう。

土器。小片のものがほとんどで所属様式を判定しにくくしているが、そのうち多數を占める甕形土器を手法上で区別すると、厚手で外面タキメ・内面ハケメ・ナデによるものと薄手で外面ハケメ・内面ヘラケズリ・ナデ・ハケメの調整法を用いるものに二大別される。口縁を中心とした部の復元された同類の土器から、前者は弥生式土器で後期のもの、後者は古式土器のいわゆる布留式に属するものである。前者はその中でも終末期あるいは過渡期のものに相当するものがほとんどではないかと考えている。また、外来系の土器としては、第14図11の酒津式甕形土器の口縁部がある。いわゆる河内系の土器は確認されなかった。北方の丘陵上に位置する垂水遺跡では、搬入の度合が高いと好対照である。但し、今回的小範囲での結果から論じることはできないが、諸外来系土器の搬入の有無や在地系土器群に占める度合などは地域間の緊張関係の統一この時期にあっては、それらのある一面を反映しているとも考えられ興味深いものである。今後の調査で注意すべき項目である。

以上のように、今回弥生時代終末期～古墳時代前期に至る土器の出土することを確認したが、残念なことに二次的な堆積によって形成された包含層中からのもので、遺構と共に伴したものではなく、純粹な状態で抽出できなかった。今後、良好な資料の出土によって、この地域における弥生時代～古墳時代の移行期の編年を組み立ててゆきたいと思う。

しかし、今回のこの時期の土器出土により丘陵上の垂水遺跡との関係がより一層明確になってきたように思われる。すなわち、垂水遺跡で弥生時代中期後半に始まった高地性の集落が、後期終末の時期になって丘陵下の集落へと移動したようである。また、後期以前の垂水南遺跡の在り様を追求することによって丘陵上・下の集落間の動態ひいては垂水遺跡のもつ高地性集落の性格を探ることも可能である。

現在、乏しい資料からではあるが、遺跡の各地点では布留式期の土器片が普遍的に見られることが分かっている。備測になるが、集落の消長を推してみると後期終末の段階では遺跡北辺に集落の一部が營まれていたものが、布留式期の頃に集落が拡大し、今回発見した遺跡北東部や南部を始めとする居住区が形成されたものと考えることもできるだろう。この盛期を過ぎると古墳時代後期の段階では今回の溝くらいで若干の須恵器片を採集するに止まり、集落規模は縮小したようである。これ以降、奈良～平安時代までは今のところ相当する資料が見つかっていない。先に触れたように、C-7、C-8地区では奈良～平安時代の自然流路が確認されて

いる。C-8 地区ではそれに付随した護岸用の木組みが発見された。この両地区より同時期の土器・木器等の遺物が数多く出土していることから、これらの地区一帯が奈良～平安時代の遺跡の中心部を占めていた可能性が強い。また、この時期は丁度「淀川・三国川間の掘削の開鑿」(延暦四年(785年)正月)の出来事にあたる時期である。この地域の開発において大きな面をなした事業であると評価されており、同時に垂水南遺跡でも開発の進行していくことが想像される。今後、先の発見に統いて考古学的側面からの実証が可能になってくるものと思われる。この時期以降は、この地域が官牧として、莊園經營の地として中世を迎えていくのであるが、関連した造構としては、C-4 地区の溝などを挙げる程度であり、遺物としては瓦器・土師質土器を始めとする日常雜器類の破片が若干採集されているのみである。今後の調査課題でもある。ただ、中世以降は文書からも窺えるように居住が東北方へ（現在の集落地域つまり糸田川による微高地上に）移動していったようで、遺跡は現在に至るまで水田下に埋没したままになっていたように思われる。

B-7 地点では、明瞭な造構は検出されなかったが、ほぼこの地点を遺跡の南西限の一画として捉えることができる。

以上、調査の結果を報告したように、C-5 地区では遺跡の存在が明確となった。遺跡は調査地点の周辺部にも広がっていることが予想されるため、今後同区地域の開発（現状変更）に当っては事前にその計画内容を教育委員会と協議しなければならない。また、B-7 地区では特に遺跡の存在が顕著ではなかったが、遺跡範囲の周縁部に相当すると考えられる。この地点においても開発にあたっては教育委員会との協議が必要である。

〔註〕

1. 吹田市教育委員会『垂水遺跡』1976.10
2. 吹田市教育委員会『垂水南遺跡発掘調査概報』1977.3.
3. 田能遺跡発掘調査委員会『田能遺跡概報』1967
4. 豊中市教育委員会『勝部遺跡』1972
5. 豊中市教育委員会『利倉遺跡』1976
6. 豊中市史編纂委員会『豊中市史第一巻』1961
7. 吹田市教育委員会『蹴人遺跡発掘調査概報』(現地説明会資料、プリント) 1977
8. 吹田市教育委員会『吹田の文化財、第2集遺跡と遺物』1975
9. 銀島敏也『都呂須遺跡の覚書』1972 (プリント)
10. 吹田市史編さん室・関西大学考古学研究室『垂水遺跡第1次発掘調査概報』1975.3.
吹田市教育委員会・関西大学考古学研究室『垂水遺跡第2次発掘調査概報』1975.3.
11. 田中 琢『布留式以前』『考古学研究46』1965
12. 吹田市史編さん室・関西大学考古学研究室『吉志郡古墳発掘調査報告』1973

13. 島田次郎編『日本中世村落史の研究』1966
14. 土層第Ⅳ層の5~10層については、深掘ピットにより確認されたもので縦断トレンチなどによって層序関係を確認しておらず、それらの対応如何は不明である。なお、調査途時の段階ではⅣ~Ⅴ層の区別は難しく、Ⅴ層上面より約5cm単位ごとに掘り下げを行った。したがって、各出土遺物の層位はⅤ層上面からの深度の数値を後で断面図より読みとて充てた。
15. 先に調査概報において同道としたもの。名称不適切のため譯と改称する。なお、単に溝と呼ぶ場合はこの溝槽を指すことにして、後述する南北小溝と区別する。
16. 本地点は、豊島中条2条1里32坪に相当する。旧小字名は内ノ穴である。また、B-7地点は同3条2里1坪に旧小字名は六ノ坪である。
17. 稲原考古学研究所『櫛向』1976
18. 判断の根拠となった須恵器片は細片の上層内堆積層中の出土ということで、その指示示す年代には幅が予想されるが、一応先の年代として捉えておく。また、須恵器片は6世紀代でも中葉あるいは後半のものである。
19. 出土遺物のうち土器類については別表にて個々の細かな特徴を記述した。
20. 末永雅雄、小林行雄、中村春寿『大和に於ける土師器住居址の新例』『考古学』第9巻第10号 1938
坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』1956
安達厚三・木下正史『飛鳥地域出土の古式土器』『考古学雑誌』第60巻第2号 1974
21. 錦木義昌『岡山県倉敷市酒津遺跡の土器・岡山県倉敷市西阿知町新屋敷遺跡の土器「弥生式土器集成」』
22. 原口正三『大阪府松原市上田町遺跡の調査』『大阪府立島上高等学校研究紀要』復刊第3号 1968
23. 酒井龍一『和泉に於ける「伝統的第Y様式」に関する覚え書』『豊中・吉池遺跡発掘調査概報』そのⅢ 1976
24. 田辺昭三『海邑古窯址群』1966、『日本美術工芸391・392』1971
25. 藤井直正『河内の土器』『河内考古学2』1968
藤井直正『浜津と河内』『藤部遺跡』1972
26. 24と同じ。田辺氏の第Ⅰ期、MT15~TK209に相当するものであろう。
27. 田中琢磨『畿内』『日本の考古学Ⅳ・歴史時代(上)』1967
28. 『利倉遺跡』(前出)P36の47、「豊中・吉池遺跡発掘調査概報」そのⅢ(前出)図版第47の8。
29. 黒崎直『古墳時代の農耕具』『研究論集Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第28号 1976
30. 昨年度の調査(C-7地区)より、同様の手法による木製容器が出土している。
『重水南遺跡発掘調査概報』(前出)P27、遺物番号206。但し、小片のため脚部が付くかどうかは不明。
31. 本報告では古墳時代を前期・後期に分ける二時期区分に依っている。なお、弥生時代末期~古墳時代前期へかけての編年観も本地域での良好な資料がないため暫定的なものである。
32. 「土地条件図大阪西北部・大阪東北部」1965、「2万5千分の1集成図大阪」1974(国土地理院)には遺跡東方の糸田川と西方の高川との中間、山麓部に自然堤防の痕跡が認められる。堀により検出された古代の川跡に対応するものであろうか。この古代の川も中世以降には縮小したようで今日ではその姿を見せない。
33. 吹田市教育委員会『重水南遺跡発掘調査概報』(現地説明会資料、プリント)1978
34. 吹田市史編さん室、関西大学考古学研究室『重水遺跡第1次発掘調査概報』1975、吹田市教育委員会・関西大学考古学研究室『重水遺跡第2次発掘調査概報』1975、第1次調査では1.57%、第2次調査ではより高い出土率を示している。
35. 続日本紀延暦四年(785年)正月庚戌条に「遣使柵浜津國神下。梓江修生野。通干三国川」とある。
36. 島田次郎編『日本中世村落史の研究』1966(前出)



東方より



南方より

図版2 調査地点の全景

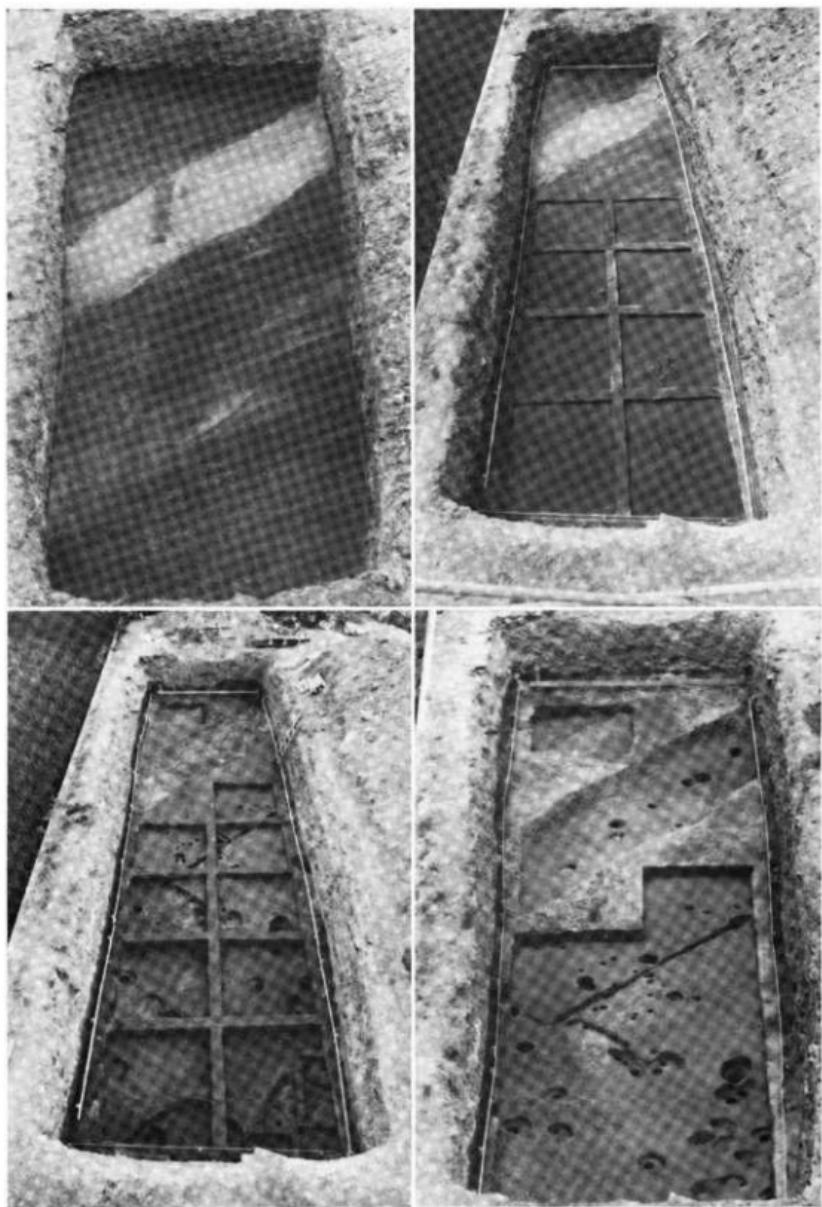
北側上方より



第1層 上面



発掘最終面での遺構



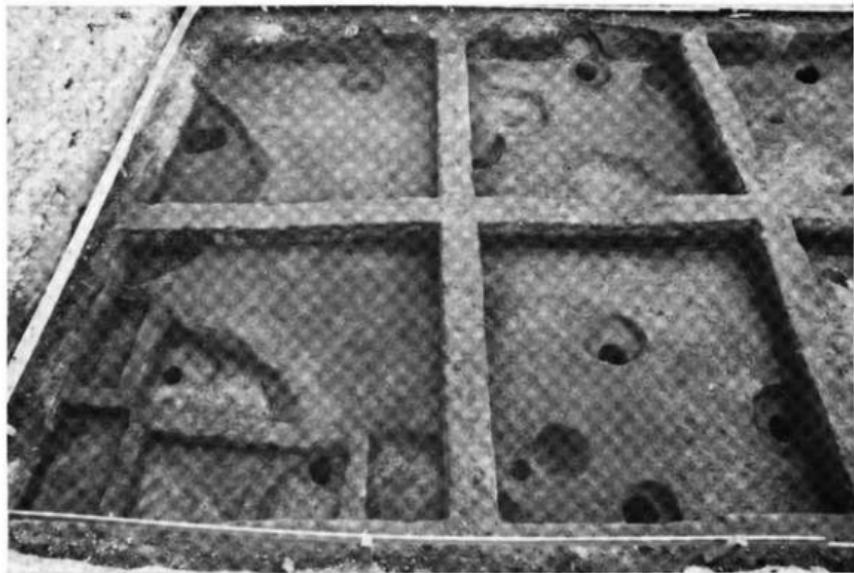
1. 南北小溝・溝(剖面上面) → 2. 土器出土状況(剖面) → 3. 土壙・掘立柱穴・壁穴住居等 → 4. 最終遺構面



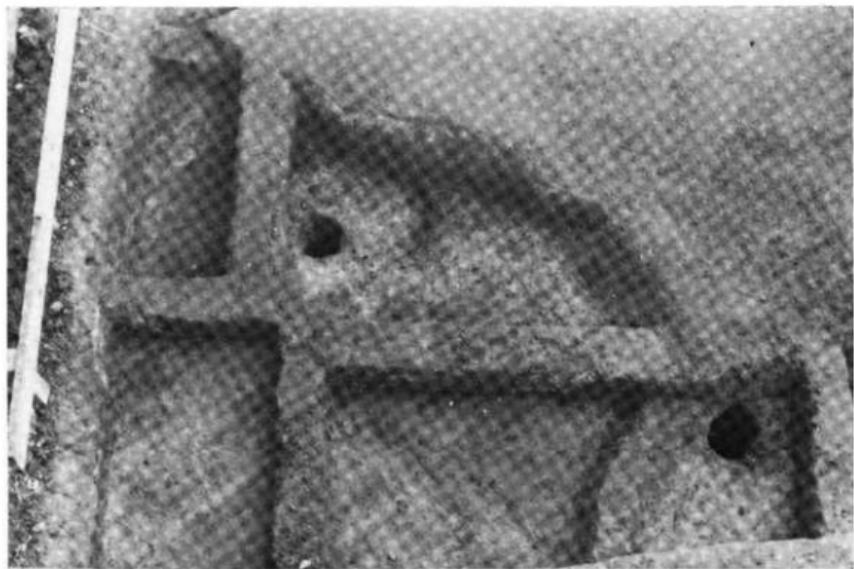
南北小溝・溝（5～12区）西方向より



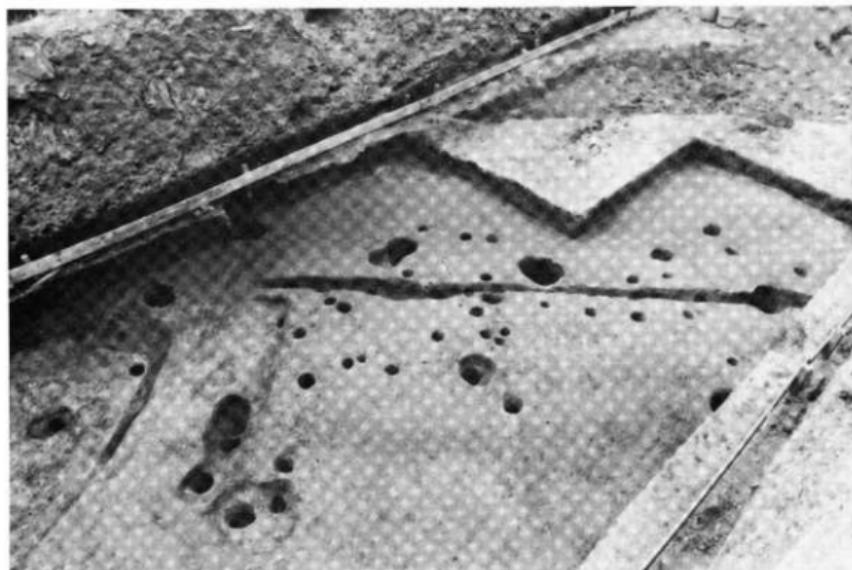
土器出土状況（15区第Ⅱ層）



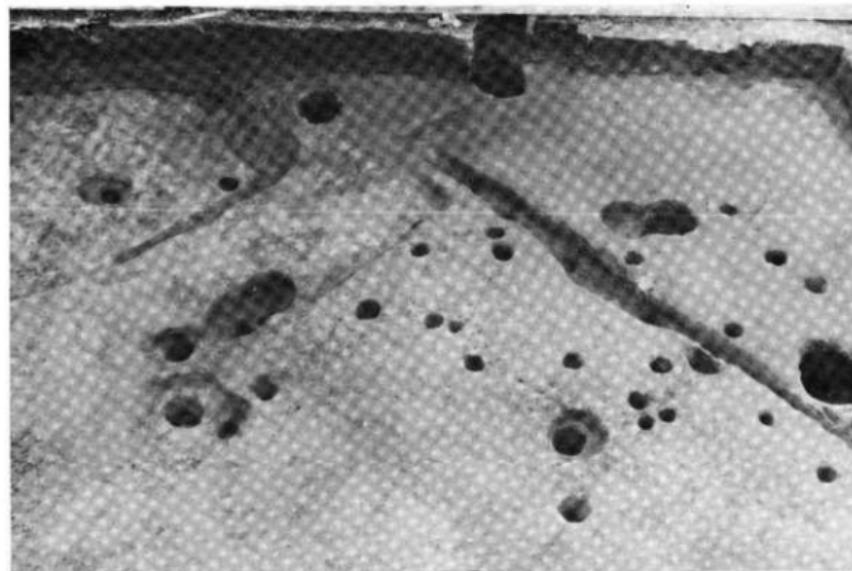
土壤37~39・掘立柱穴（1・2・15・16区）西方向より



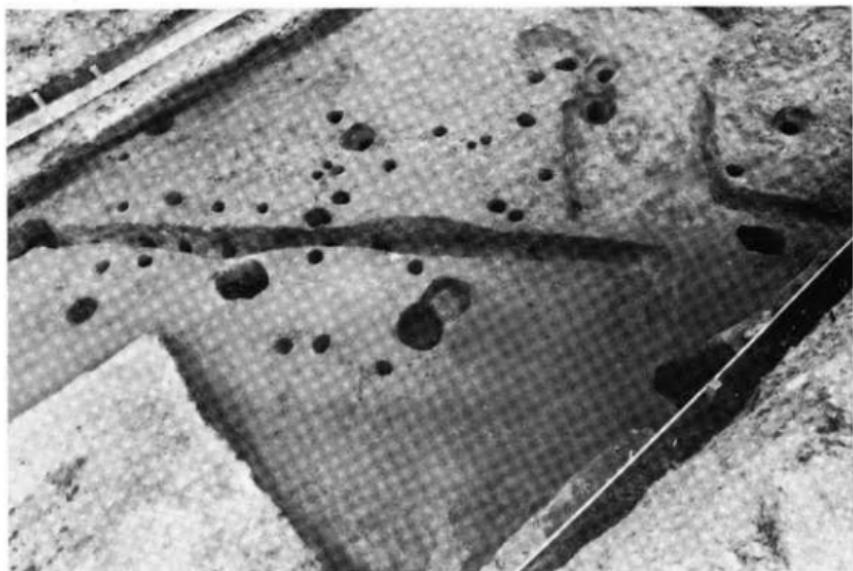
土壤38・39と掘立柱穴（16区）



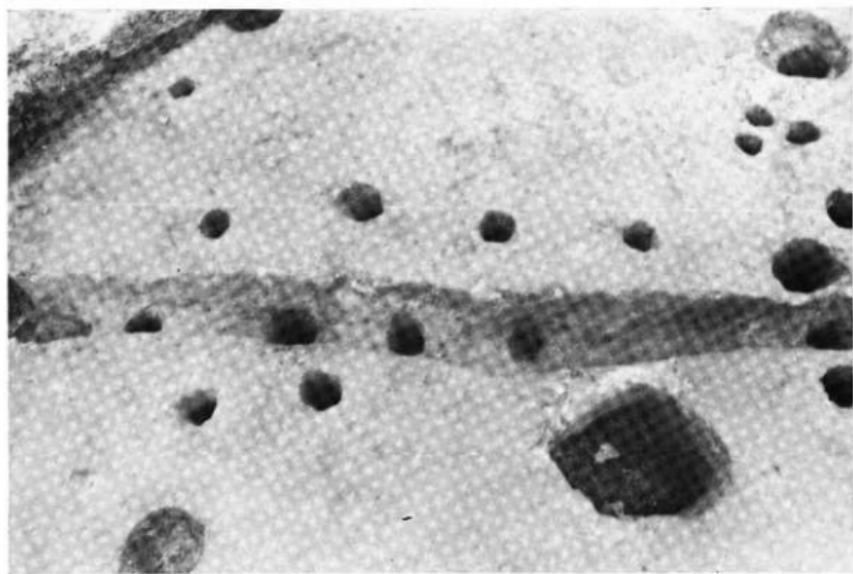
右より1・2・4号住居址北西方向より



同上 西方向より

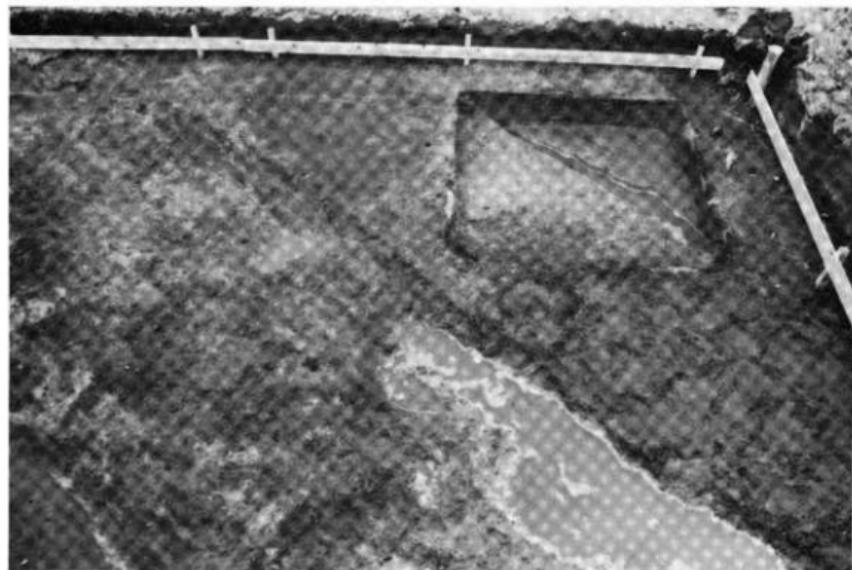


1・2・4号住居址 南東方向より

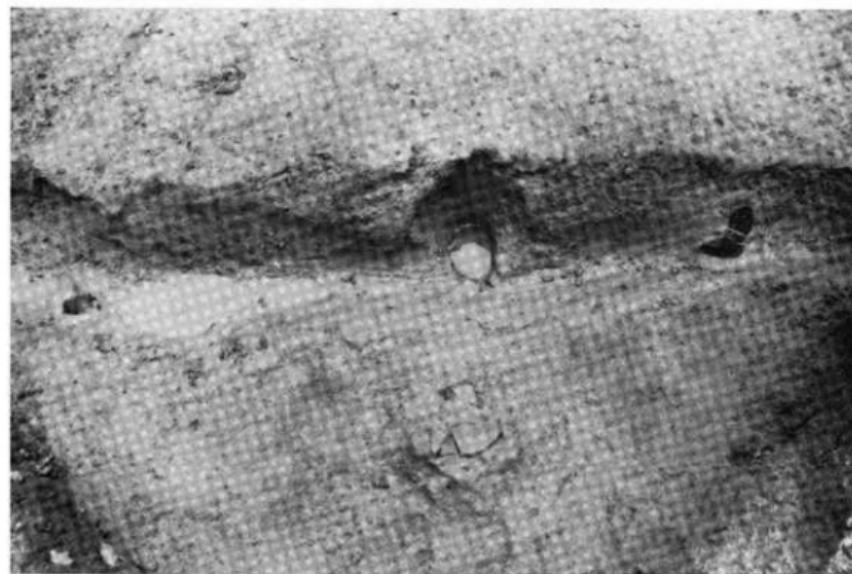


1号住居址、溝と小穴 右下の土壤は土壤36

図版 8 積穴式住居址（3号住居址）



3号住居址と溝 東方向より



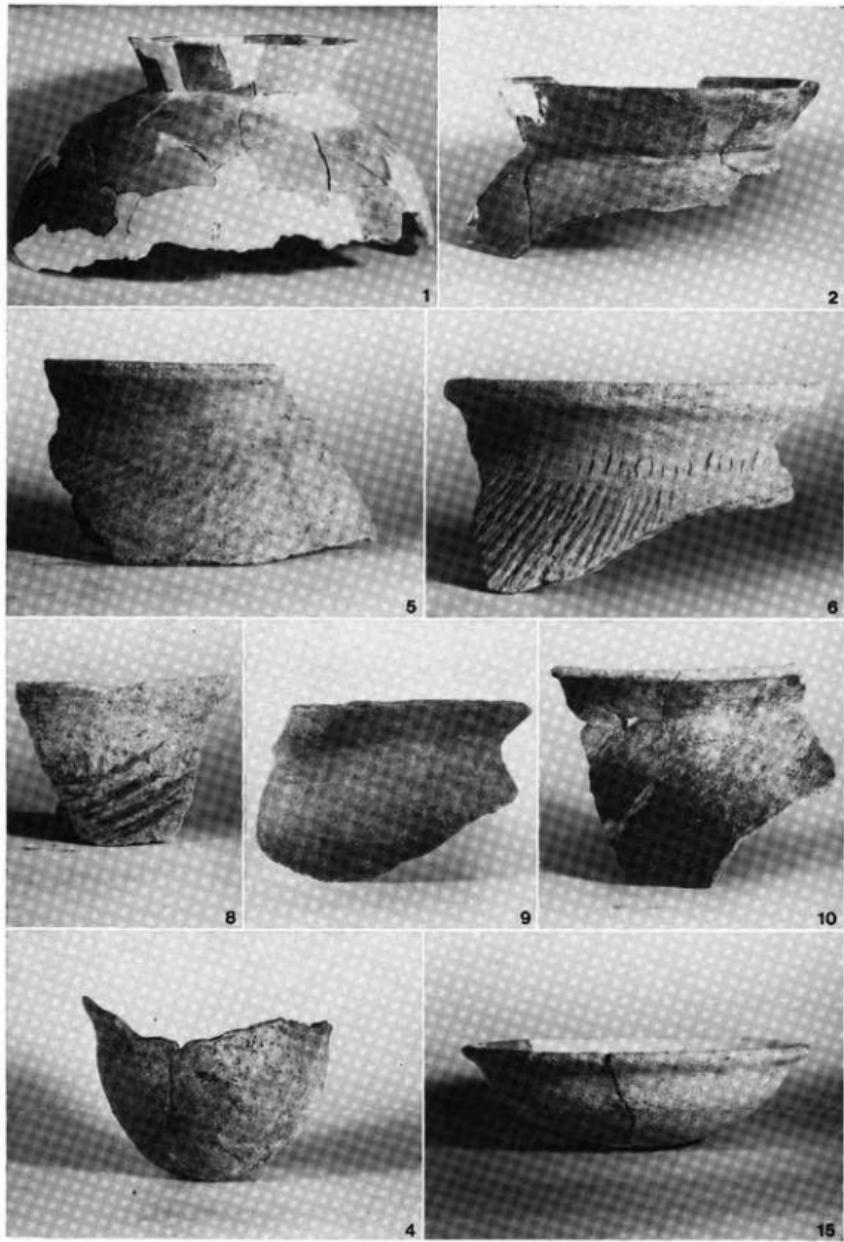
住居址 溝と小穴 土器出土状況 南東方向より

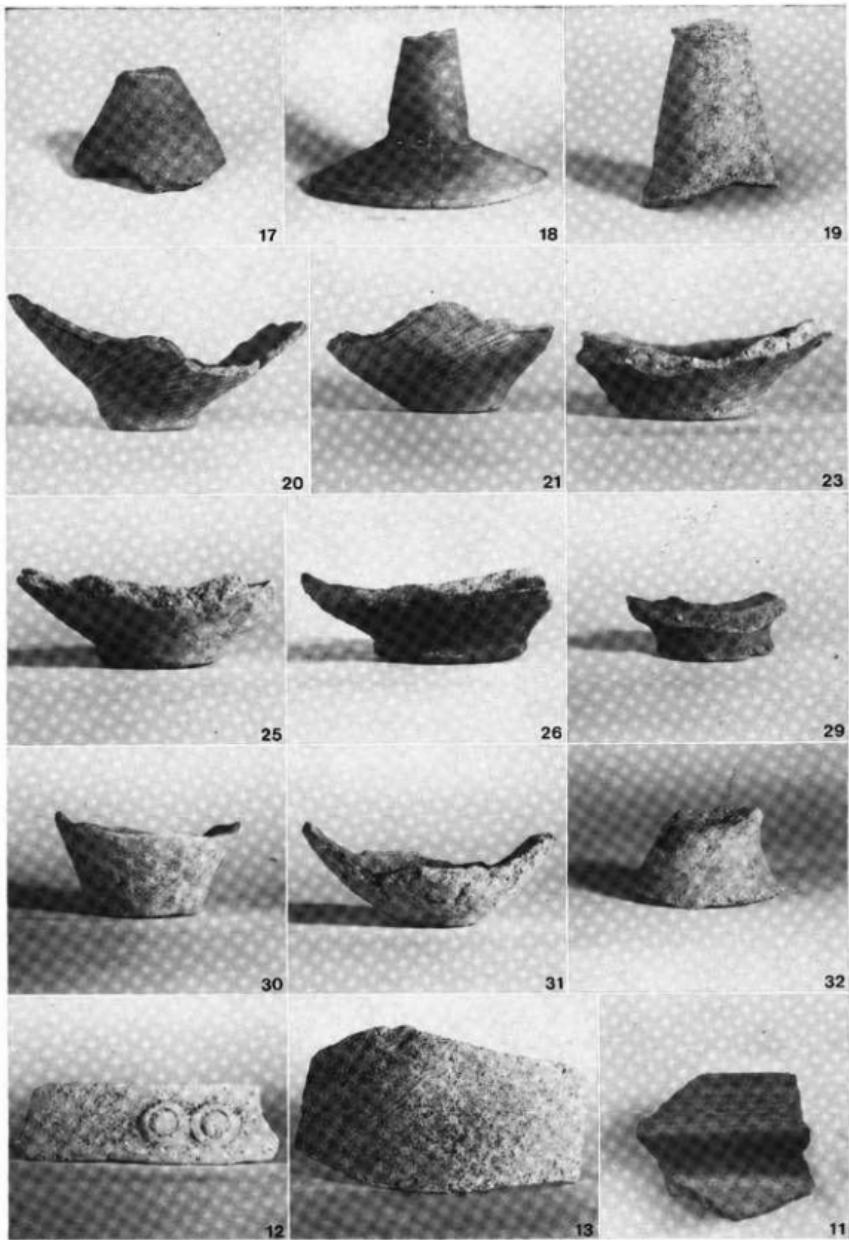


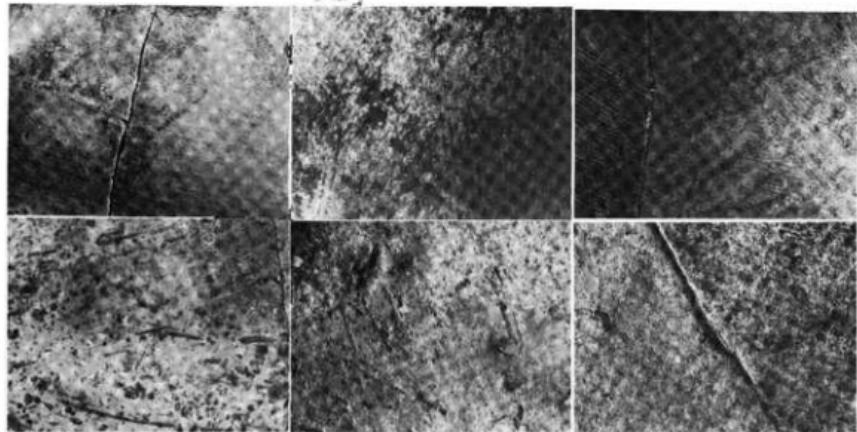
発掘前 南東方向より



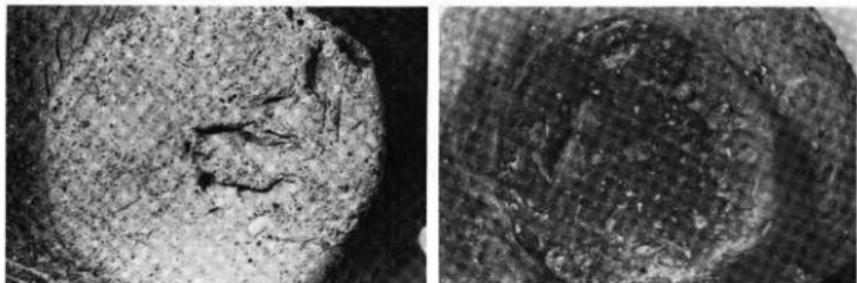
丸木杭・木片出土状況(18区群層) 北西方向より



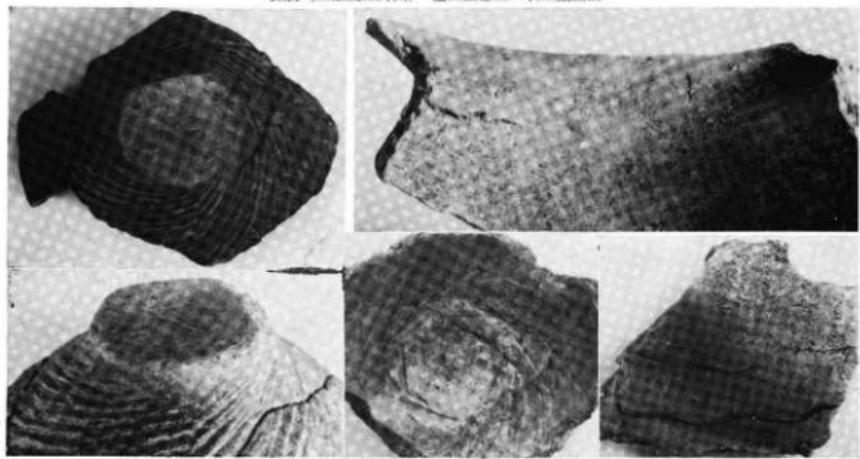




左・上 ヘラミガキ(外面) 下 ヘラケズリ(内面) 土器1、中・上 ハケメ(外面) 下 ヘラケズリ(内面)、右・上 ハケメ(外面)
下 ミコナデ(内面) いずれも腹部

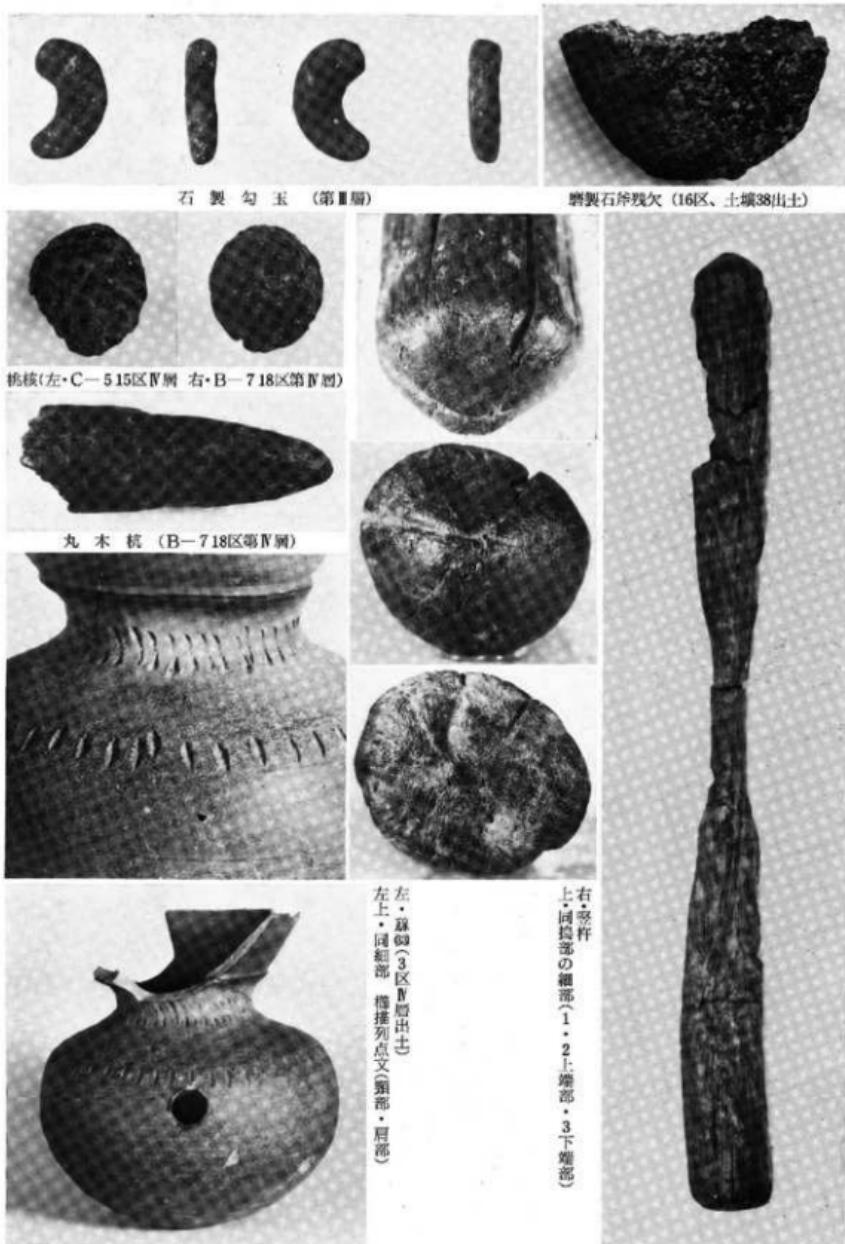


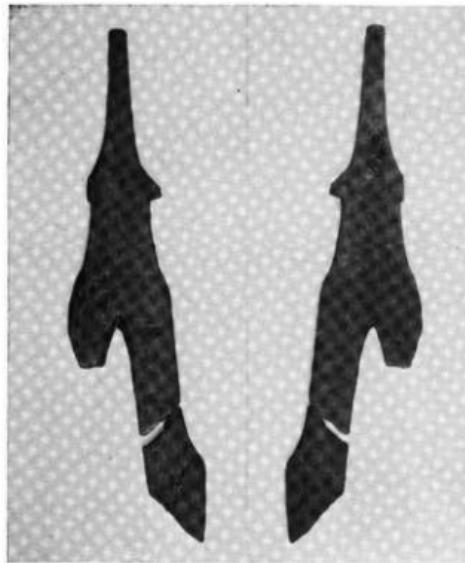
横痕(土器底部外面) 左は土器21・右は土器25



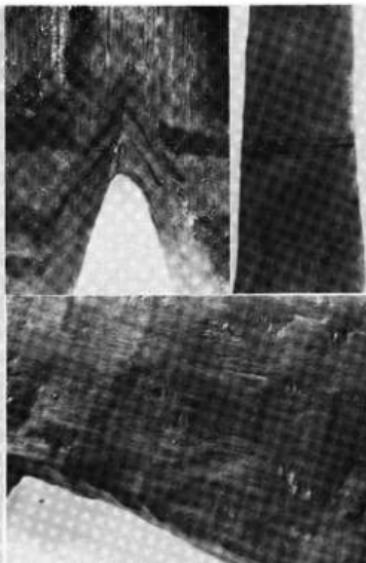
上 タタキメ・ヘラ痕(土器20底部外面)
下 同上

上 瓢部接合痕(土器9)
下・右 粘土紐接合痕(腹部内面、8区3号住居址出土)
下・左 ヘラ痕(土器31、底部内面)

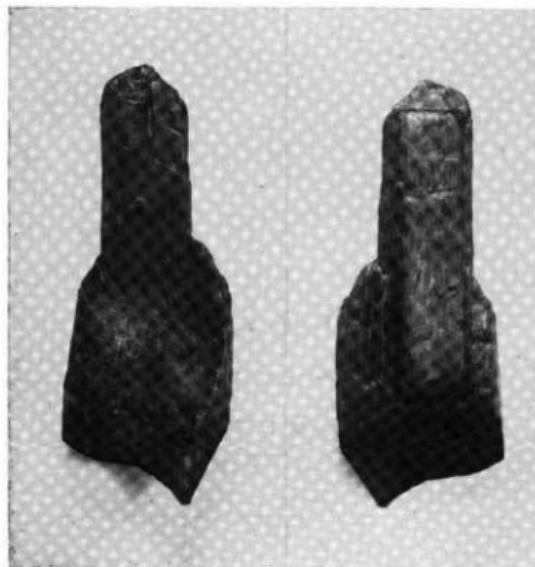




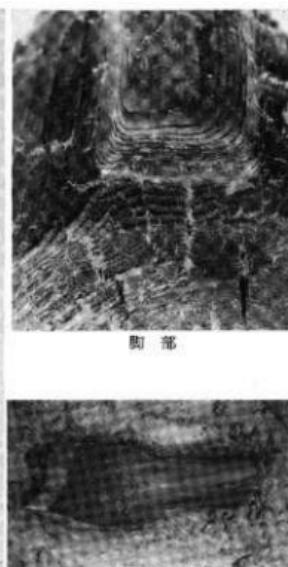
着柄部 (左A面・右B面)



上右・基部の切り込み(B面)、上左・腹部細部(A面)
下・チヌウナ痕(B面)



木製容器 (左・内面、右・外面)



木製容器出土状況

垂水南遺跡発掘調査概報Ⅰ

昭和53年3月31日発行

編集・発行 吹田市教育委員会
大阪府吹田市泉町1丁目3番40号